

平安京跡発掘史(1)

- (財)京都市埋蔵文化財研究所設立25周年を迎えて -

永田 信一

はじめに

(財)京都市埋蔵文化財研究所が発足して、25年が過ぎた。長くも短くもある四半世紀である。この25年間の発掘を振り返れば、成果をあげた様々な発掘がある。研究所25周年を迎えた機会に、昭和55年(1980)までの平安京跡の調査実績と成果、調査研究を取り巻く保護体制、普及啓発活動などを時間経過を追ってまとめたいと考えた。過去の平安京跡発掘を総括し、今後の平安京跡の調査・研究に活かして行きたいと考えたからである。

考古学にとって発掘は、学問の性格上欠かせない行為であるが、いわゆる原因者負担の行政指導による発掘は、これまでの社会状況と関連して推移してきた。それは平安京跡を取り巻く諸状況を如実に反映してきた。平安京跡と社会状況がどういう関係にあったのか、社会状況に制約されながら、どのような発掘があったのか、発掘によって何が生み出されてきたのか、発掘という視点から平安京跡を見直してみたいと考えた。

昭和56年(1981)4月、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが設立される(文序-1)。10月には、京都市文化財保護条例が公布された(文序-2)。

この昭和56年(1981)に京都府下の現調査体制の枠組みが確立され、平安京跡調査体制の一時期を画している。そうしたことから今回は、昭和55年(1980)までを「平安京跡発掘史(1)」として扱い、昭和56年(1981)以後は次回に改めて記すことにした。

平安京跡に関する公表された文献をできるだけ収集して叙述したが、収集しきれなかった文献も多い。主観的な判断も入るかもしれないが、今後のためにとりあえずまとめることにした。平安京跡を発掘の視点から調査の成果と取り巻く諸状況を振り返ってみることにする。

1. 平安京跡発掘事始め [寛政2年(1790)～昭和20年(1945)]

1 有職故実と集古趣味 平安京研究の先達

裏松固禪と藤貞幹 江戸時代の後期、石器や瓦などの遺物を集め、往古の姿を趣味的に論じ合うことが流行する。背景に過去に理想を求め、皇室中心の世をめざす尊王思想の潮流があった。裏松固禪、藤貞幹は、尊王思想の持ち主ではあったが、平安京跡研究の先達としての役割を果たした。

『大内裏図考証』 裏松固禪(1736～1804)は、考証学派とされ、平安京を有職故実にもとづき体系的に寛政2年(1790)、『大内裏図考証』全50冊をまとめる。天明の大火による内裏の焼亡が著

述する契機となり、老中松平定信に認められ、内裏再興を命じられた。『大内裏図考証』は、平安京の規模や構造が考証され、詳細に記載されている。現在でも平安京跡研究の基本文献であり、平安京跡調査の事前資料として生かされている。

『古瓦譜』 藤貞幹（1732～1797）は、木内石亭とともに江戸時代を代表する好古家、考証学者である。正式の名は藤原貞幹で、藤貞幹は中国風の呼び名である。裏松固禅と親しく、『大内裏図考証』の著述を助けた。彼自身の著作も多く、なかでも『古瓦譜』は著名である(文1-1)。寛政8年(1796)、晩年の藤貞幹は、『好古目録』で出土した瓦が古代研究の資料であり、なかでも文字瓦は碑文と並んで、とくに重要だと述べる(文1-2)。

2 西洋化の影響 近代考古学の萌芽

「平安京旧址実測全図」の発刊 明治維新の急速な西洋化より、学問分野にも西洋の近代的手法が取り入れられる。明治10年(1877)には、E.S.モースが、東京都大森貝塚を発掘する。報告書で、日本に石器時代が存在することを立証し、近代科学として日本考古学が発足した。

遅れること18年、明治28年(1895)、近代測量術を用いた実測図に『延喜式』の京程を乗せ、地図上に平安京の条坊復原が行われ、「平安京旧址実測全図」『平安通志』が発刊される。東寺と堀川は平安京創設以来、位置が動いてないという前提をたて、東寺の伽藍と堀川の方位および現尺に対して0.999となる値を造営尺として条坊を復原した。地図という近代的な手法に平安京の条坊を復原する画期的な業績であった(文1-3)。後にこの造営尺が問題となる。

『考古学会雑誌』の刊行 翌、明治29年(1896)、西洋の考古学に触発され、歴史を明らかにするには、遺物・遺跡の知識が必要と言う認識が生まれ、『考古学会雑誌』第1号が刊行される(文1-4)。『平安通志』、『考古学会雑誌』第1号の発刊は、平安京跡の調査研究の黎明期を示すものであった。明治の後半になって、ようやく西洋文明の影響が平安京跡の研究にも及んできたのである。

瓦研究の始まり

平安京跡出土瓦の紹介 明治30年(1897)、奥村探古氏は、「私ハ好古ノ癖ガアリマシテ、数年前ヨリ少シノ余暇アレハ遺跡ヲ探リ遺物ヲ拾集致シマスコトヲ第一ノ快樂トセリ、云々」から始まり、各地から採集された古瓦について、とくに「文字瓦」について意見を述べ、藤貞幹の『古瓦譜』を前提に、平安京跡の「文字瓦」は、「其等八皆延喜朝以後二八省院ノ火災其他ノ事故等ニテ新瓦ヲ補ヒシ物カト考エマス、」と述べている(文1-5)。藤貞幹の資料をそのまま信じ、本物かどうかは検証していない。このころはまだ藤貞幹の影響が強く、好古趣味的領域であった。

明治35年(1902)頃までは、集古趣味的に集められた瓦が紹介される程度で、明治36年(1903)になって初めて出土位置がはっきりした瓦が紹介されるようになる。明治34年(1901)、関野貞氏は藤貞幹を批評して、古瓦が建築物の一部で技術家の意匠を表すことから、建築史の観点から古瓦文様の研究が重要であると主張される(文1-6)。E.S.モースの発掘調査に遅れること26年後に、平安京跡や周辺の窯跡出土の瓦が紹介されるようになる。明治36年(1903)、河村松太郎氏が平安宮採集の「栗」銘の軒瓦(文1-7)を、明治41年(1908)、岩井武俊氏が緑釉瓦の布目(文1-8)を、明

治42年(1909)、和田氏は平安京跡出土の金箔瓦を紹介した(文1-9)。

昭和5年(1930)、川勝政太郎氏は、平安京跡出土の古瓦を紹介される(文1-10)。昭和8年(1933)、安田茂登治氏は、釈迦谷の山林から平安時代中期の軒瓦が採取され、紹介する(文1-11)。

3 平安京跡調査の黎明 近代考古学の黎明

藤貞幹の評価 大正4年(1915)、高橋健自氏は、藤貞幹の『古瓦譜』には贋作が多いことを最初に指摘する。「よくよく此の書を読むに、古瓦文字の殆ど半ばは捏造したるものと認むべし。(中略)かくの如く学者として世を欺きたる不謹慎なる態度に至りては、遺憾ながらまた一言せざるべからざるなり」と述べている(文1-12)。

最近、日本最初の古瓦拓本集を作成した藤貞幹が平安京跡の文字瓦をなぜ捏造したのか上原真人氏は、その経過を論じている。偽造テクニックは二重採拓法であったとされる(文1-2)。藤貞幹の偽造は、集古趣味の限界を示すものであろう。

京都帝国大学の考古学講座 大正5年(1916)、日本で初めての考古学講座が京都帝国大学に設けられ、初代教授として浜田耕作氏が就任する(文1-13)。日本考古学の理論的確立が試みられ、近代的考古学が創始され、その影響が平安京跡にも及ぶ。

大正9年(1920)、梅原末治氏によって西寺跡の現状報告、採集瓦の紹介が行われ(文1-14)、修学院村の高野で採取された「小乃」銘の瓦も掲載される(文1-15)。出土地の明白な資料や遺跡の現状が、写真や図を使用して報告書として紹介されたことは画期的なことであった(文1-14)。同年、西田直二郎氏は、聚楽第跡から出土した金箔瓦を紹介する(文1-16)。大正11年(1922)には、比較研究のさきがけとして、梅原末治氏は、修学院村の採取瓦が平安宮跡採取の瓦と一致することを紹介され(文1-17)、生産地と消費地との関係が問題になりはじめる。

昭和2年(1927)、西田直二郎氏は、河原町線の電車軌道敷設のための道路拡張で出土した緑釉瓦を紹介した(文1-18)。

発掘の始まり

平安京淳和院跡の発掘 昭和2年(1927)、平安京淳和院跡で、はじめてトレンチによる発掘調査が行われ、西田直二郎氏によって報告される(文1-19)。平安京跡が発掘調査されるのは、E.S.モースの大森貝塚の発掘調査から50年後のことである。昭和3年(1928)、丸太町通の拡張にともなって豊楽院の基壇が検出される。今でいう都市遺跡の調査法である「立会」「試掘」が実施されたが、報告は戦後になってのことであった(文1-20)。

考古学にとって発掘調査は調査研究の基本であり、ようやく昭和初年頃になって、平安京跡が考古学の発掘調査の対象として認知され、調査内容が報告書として刊行されたと言える。

「栗栖野瓦屋」の発掘 昭和5年(1930)、木村捷三郎氏は、幡枝で発見された窯跡が『延喜式』記載の「栗栖野瓦屋」であることを主張され(文1-21)、確かめるために、昭和6年(1931)11月、「栗栖野瓦屋」が発掘調査され報告される(文1-22)。文献内容と遺跡内容の整合性を追及することによって瓦屋を実証した優れた業績であった(文1-21)。

地理学的考察

賀茂川の流路復原 昭和7年(1932)11月、塚本常雄氏は、平安京造営から明治、大正期までの京都市域の変遷を地理学的考察から都市史を論述される。京都の地勢から「往古の賀茂川は今日の流路を保ちたるに非ずして、高野川と共に此の南半部の地帯に於て、幾度か其流路に変遷を興へたるものと云ひ得べし。」と述べ、『平安通志』に、桓武帝遷都に及び賀茂川の川脈を長堤によって東に寄せたと記されていることもうなずけるとする(文1-23)。

4 史跡保存の高まり 排仏毀釈から文化財保護へ

排仏毀釈 明治元年(1868)、全国に蔓延した排仏毀釈の嵐は、数多くの宗教関連文化財の破壊、流出を招くなどの大混乱を引き起こした(文1-24)。明治4年(1871)、排仏毀釈運動による古寺、名刹の宝物などの亡失の防止を目的に「古器旧物保存方」を命ずる太政官布告が出されている。その範囲は今日いうところの動産文化財で、史跡や建造物を含む不動産の保存には及んでいなかった(文1-25)。明治21年(1888)、宮内省に臨時の全国宝物取調局が設置され(文1-25)、明治30年(1897)、ようやく「古社寺保存法」が制定される(文1-25)。明治32年(1899)3月、「遺失物法」が制定され、法律第87号の第13条に「學術技芸若ハ考古ノ資料ニ供スルヘキ埋蔵物」とある(文1-25)。この間、動産の文化財は大きな被害を受けたが、平安京跡のような地下の文化財は、被害を受けることは無かった。

普及啓発の限界 明治28年(1895)10月、遷都1100年を記念して、京都市参事会は『平安通志』の平安京実測図にもとづいて、大極殿の顕彰碑を建立する(文1-26)。この顕彰碑の建立の動きは、後に大正8年(1919)3月、黒板勝美氏が「従来史蹟保存ノ事業ニ於テハ、京都市教育會ガ市中散在ノ遺趾ニツキ漂石ヲ建テタルコトアルノミニシテ、其範圍モ廣キニ亘ラズ」と述べている(文1-27)ように、大極殿の顕彰碑を建立以後も大正から昭和にかけて、市内各所に漂石を建て史蹟を顕彰することが行われた。

「史蹟名勝天然記念物保存法」の施行 文化財の散逸、破壊を防ぎ、天然記念物を保護しようとする動きが高まり、明治44年(1911)「史蹟及天然記念物保存ニ関スル建議案」が貴族院に提出され、大正8年(1919)には、美術工芸品、文書典籍の動産文化財とともに建造物にも保護を加える「史蹟名勝天然記念物保存法」が施行され、第1回指定は大正10年(1921)3月、全国46箇所が対象となり、国の史蹟として指定された(文1-24)。遺跡の観点からすれば、史蹟指定されたものがようやく保護の対象となった。

京都府では、大正6年(1917)に京都府会で「京都府史蹟勝地調査会」の設置が決まり、7月には「京都府史蹟勝地調査会」が組織される(文1-25)。大正8年(1919)6月、京都府から『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊が刊行される。この報告を受け、大正10年(1921)3月、西寺跡が国の第1回の指定で史跡に指定された(文1-28)。昭和9年(1934)1月、栗栖野瓦窯跡も史跡に指定される。

5 戦争への道

皇国史観の考古学

藤原宮跡の発掘 大正から昭和初期の動きは、他の研究分野に遅れはとっていたが、平安京跡調査研究の発展を促した黎明期として位置づけられよう。近代的歴史考古学のめばえは、大正から昭和初期に生れている。藤原宮跡では、日本古文化研究所の事業として、足立康氏を中心に、昭和9年(1934)～昭和17年(1942)にかけて発掘調査が行われた。大宮土壇とよばれるものが大極殿跡であることを実証し、その南に十二堂を配した朝堂院の遺構をつぎつぎに検出した(文1-29)。

平安京跡調査研究の衰退 しかし、皇国史観の台頭とともに、天皇につながる遺跡は、一部で調査されるが、本来の近代考古学は、時代のうねりに押しつぶされて行く。その状況は、平安京跡の調査研究の減少に現れた。昭和8年(1933)、第1回明治天皇聖蹟の史蹟指定が一挙に86件指定されて以後、皇国史観にもとづく史蹟指定が繰返され、発掘調査は神武天皇聖蹟の顕彰事業として行われている(文1-24)。それ以後、平安京跡の調査研究は、採取瓦の紹介程度になり、昭和14年(1939)木村捷三郎氏の平安京跡緑釉瓦の研究発表を最後に(文1-30)、一部、平安京跡出土の風字硯などが昭和19年(1944)に紹介されるが(文1-31)、戦後まで調査研究の空白期が続いている。

2. 新たなる出発 [昭和21年(1946)～昭和45年(1970)]

1 平安京跡調査への道 敗戦からの出発

「古代学研究会」の結成 敗戦まもない昭和22年(1947)7月、弥生時代の農耕集落である静岡県登呂遺跡の発掘調査が始まる(文2-1)。皇国史観から開放された国民の遺跡調査への期待は、急速に高まりその気運が全国に広がって行く。

平安京跡の調査研究では、在野の考古学者が「古代学研究会」を結成し、昭和24年(1949)8月、雑誌『古代学研究』第1号が発行される(文2-2)。宇佐晋一氏は「延喜式と瓦の重量」について発表され、平安時代前期瓦について重量に関する見解を述べている(文2-2)。

同年9月からは、平安京跡の調査が再開され、有志によって、旧二条城の石垣が検出され、金箔瓦や緑釉瓦が出土した。あくる昭和25年(1950)2月に、『古代学研究』第2号が発刊され、その紙面に調査報告がなされる(文2-3)。

これは平安京跡の左京域を対象に行われた最初の調査であり、土木工事との調整を行い、困難を乗り越えて、調査チームがつくられた。9日間ではあったが、調査が実施され報告されたことは画期的なことであった。現在で言えば、立会・試掘調査のレベルではあるが、その後の展開を考えれば、都市遺跡調査の先駆けとして十分に評価できる。これ以後も昭和30年(1955)7月、宇佐晋一・小川敏雄氏が、電話工事で採取された緑釉陶器を分光分析されるなど、積極的な研究活動が続けられている(文2-4)。

2 発掘調査の再開 (財)古代学協会の調査

平安宮 昭和34年(1959)9月、大極殿跡が調査される(文2-5)。平安京跡の戦後最初の調査となる。

昭和37年(1962)12月、凝灰岩の切り石や古瓦が工事中に発見されたことから、緊急に朝堂院跡の発掘調査が行われる(文2-6)。

昭和38年(1963)6月、大極殿の北端と推定される茶褐色粘土層を平安宮の土壇と考えるが、朝堂院の遺構と確定することはできなかった(文2-7)。

9～翌年3月にかけて平安宮内裏跡付近で、下水道工事が行われる。内裏跡の緊急の立会調査が行われ、内裏に関連する凝灰岩で化粧された基壇の一部が検出された(文2-8)。

昭和40年(1965)5～6月、平安宮跡の発掘調査が行われ、平安時代末の瓦がわずかに出土する(文2-9)。

昭和44年(1969)2月、内裏の発掘調査が行われ、初めて平安宮内裏内郭回廊の南西部の基壇を検出する。待望の平安宮の遺構の発見であった。部分的にしる平安宮の遺構が存在することを証明したことは重要なことであった。この発見は、下水道工事の立会調査が発掘の契機になるという市街地ならではの特徴を有していた(文2-10)。

8月、豊楽院跡の発掘調査で、瓦溜が検出され、多量の平安時代の瓦が出土した(文2-11)。

左京 昭和32年(1957)11月から「大谷大学の国史学会」と提携して(財)古代学協会が、左京三条一坊五町の勤学院跡を戦後初めて発掘調査する(文2-12)。

昭和41年(1966)5～6月、押小路殿跡南東付近の発掘調査が行われ、多数の遺物が出土した(文2-13)。

昭和44年(1969)5～6月、三条西殿跡の発掘調査では、平安京の三条大路、烏丸小路の街路側溝が検出される(文2-14)。

右京(西寺) 昭和45年(1970)7～8月、西寺跡第4次発掘調査が行われ、西寺の築地遺構が検出される(文2-15)。

羅城門 昭和35年(1960)8～9月、羅城門跡が発掘調査される。しかし、市街地で、調査面積は狭く、しかも遺跡の残存状況が悪く、期待に反して、目立った調査成果をあげることができなかった(文2-16)。

昭和36年(1961)9月、期待を込めて再び、羅城門跡が発掘調査される(文2-17)。しかし瓦片、土器片の出土にとどまった。

京都府教育委員会の調査

平安宮 昭和38年(1963)9月、聚楽廻東町の民間(ブラザー工業株式会社)の敷地が調査される(文2-18)。

10月、日本放送協会京都館改築現場の北西端を発掘調査する(文2-18)。

昭和39年(1964)12月、旧二条通六軒町下る東一帯(山陰線二条駅北西)を調査する(文2-19)。

左京(東寺) 昭和36年(1961)11月、埋蔵文化財と関連する分野に建造物の解体修理がある。京都府が東寺の講堂を修理するにあたって調査され、検出された講堂の基壇が紹介される(文2-20)。

右京(西寺) 昭和35年(1960)6月、杉山信三氏によって、平安京西寺跡第1次発掘調査が行われる(文2-21)。目的は、西寺の伽藍中軸線と東寺の中軸線間を測定し、平安京の南北の基線を明らかにし、平安京の条坊復原の精度を高めることであった。それには、まず西寺の遺構を検出し、西寺の伽藍配置を明らかにする必要がある。この発掘調査で、西寺の東僧坊跡が検出され、伽藍の一角が明らかになる。

昭和37年(1962)2～3月、史跡西寺の食堂院跡が第2次調査として発掘調査される(文2-22)。

11月からは第3次調査が行われ、西寺の食堂、八脚門、回廊、金堂、南大門の位置を究明する発掘調査がなされた(文2-21)。

坂東善平氏の調査

昭和25年(1950)頃から昭和48年(1973)、平安京跡の土器を含め多彩な遺物を盛んに工事中に採取され、報告される(文2-23～51)。

3 遺跡の保護と体制

埋蔵文化財の保護

「文化財保護法」の成立 昭和25年(1950)、法隆寺金堂の火災を契機に「文化財保護法」が制定、公布される(文2-52)。「埋蔵文化財」という用語が条文に採用され、史跡以外の遺跡も保護の対象となった。昭和30年(1955)、長岡宮朝堂院の門跡の発掘調査(文2-1)、昭和32年(1957)、平安京勸学院跡の発掘調査(文2-12)など、都城調査の端緒はすでに開かれていたが、昭和36年(1961)4月になって京都府に初めて埋蔵文化財技師が着任し、埋蔵文化財の保護行政がようやく動き出す(文2-53)。

京都府埋蔵文化財技師の着任 実際に平安京跡調査に行政指導の影響が生じてくるのは、昭和36年(1961)4月、堤圭三郎氏が京都府教育庁文化財保護課の埋蔵文化財技師に着任されてからのことである。氏は着任早々、「京都府遺跡目録」をガリ版刷りで1300件の遺跡を登録され刊行された。しかし、平安京跡全体が埋蔵文化財として登録されたのではなく、史跡西寺のみであった(文2-53)。昭和38年(1963)10月になって、ようやく平安宮跡、羅城門跡が埋蔵文化財として登録、公告され認知される(文2-54)。昭和39年(1964)3月には、『埋蔵文化財発掘調査概報』1964が京都府教育委員会から発刊される(文2-55)。昭和40年(1965)6月、「日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包含地の取扱いに関する覚書」が、文化財保護委員会とかわされ、発掘調査委託費は公団の負担となった(文2-56)。

京都市の埋蔵文化財保護 昭和37年(1962)、京都市では観光局施設課に初めて文化財係が置かれるが、係の役割は文化財一般の保護整備に関連する連絡調整にとどまり、直接平安京跡調査の行政指導に関わることはなかった。昭和40年(1965)、京都市観光施設課に置かれていた文化財係が、施設課を離れ観光局文化課保存係に所属するようになる。しかし、平安京跡の保護行政に大きな変化を伴うものではなかった。平安京跡全体に行政が指導的役割を果たすようになるのは、昭和45年(1970)に市長部局の文化観光局に文化財保護課が誕生してからのことである(文2-57)。

この一連の流れは、「文化財保護法」をもとに行政指導が行われ、平安京跡調査が実施される時代に突入する前夜であることを意味していた。また、それは行政指導によるいわゆる原因者負担による平安京跡発掘の端緒を開くことでもあった。

(財)古代学協会の設立

発掘の受け皿 昭和23年(1948)4月、「日本考古学協会」が結成され(文2-58)、昭和27年(1952)4月、「奈良国立文化財研究所」が発足し、昭和29年(1954)1月には「文化財保護委員会」が平城京の発掘調査に着手する。昭和31年(1956)からは、この調査を「奈良国立文化財研究所」が担当することになった(文2-59)。

こうした全国の動きに対応して、昭和26年(1951)10月、(財)古代学協会が設立され(文2-60)、昭和27年(1952)1月、『古代学』第1巻第1号が創刊される(文2-61)。ようやく平安京跡の発掘調査の動きが整うようになる。これ以後、昭和34年(1959)から昭和45年(1970)までは、(財)古代学協会が平安京跡調査の主な受け皿であった。(財)古代学協会の発掘調査は、平安京跡調査の先駆的な役割を果たしたと言えよう。

4 保存運動の高まり 都城の保存運動

平城宮跡の保存運動 昭和37年(1962)、私鉄車庫建設による平城宮跡破壊の危機が報道されると、市民を結集して「平城京を守る会」が結成され、広範な国民運動になり、この年、「関西文化財保存協議会」が結成された。翌年には平城宮全域の保存が決定する(文2-62)。この保存運動は、平安京跡に直接影響を及ぼすことはなかったが、すでに難波宮跡や長岡京跡、平城京跡の発掘調査が開始されていたことから、潜在的に平安京跡の重要性を主張することにもつながった。一方で、市街化によって平安京跡は、すでに破壊され、良好な発掘資料が得られないのではないかと考える風潮もあった。

平安京跡の保存運動 昭和38年(1963)に阪急電鉄の大宮～河原町間が開通する(文2-53)。平安京跡の左京域を横断する大工事であった。調査は若干の立会調査が行われたと聞かすが、調査報告はなされていない。その頃京都でも大規模な遺跡破壊が進行していた。高度経済成長が始まり、全国的に遺跡破壊が進行して、埋蔵文化財の保護が懸念される状況であった。

昭和30年代後半から昭和40年代にかけては、平安宮跡、平安京左京域で、盛んに下水道工事が行われた時期でもあった。坂東善平氏はこの工事で採取された平安京跡の遺物を、『古代学研究』や『古代文化』に掲載し(文2-24～51)、平安京跡の重要性を資料紹介を通じて訴えた。昭和44年(1969)の夏、坂東善平氏は120箇所を数える土木工事で出土した平安京跡内の遺物出土表を添えて、10名の有志とともに「平安京保存の要望書」を担当行政官庁に提出される(文2-63)。地味ではあるが、埋蔵文化財保護への熱意が伝わってくる。

昭和44年(1969)10月、日本考古学協会大会が、平安博物館で開催され、「日本考古学協会解体」を訴える学生が乱入する。翌年の総会、大会もすべて中止になる(文2-62)。平安京跡の保存運動と直接関係ないが、日本考古学協会に大きなショックを与えた。

5 調査研究の始動と普及啓発 調査研究の成果

西寺の伽藍配置復原 奈良国立文化財研究所の杉山信三氏は、昭和35年(1960)6月、西寺跡の発掘調査を開始する。次々と堂宇跡を検出し、昭和39年(1964)2月、西寺の伽藍配置を復原する。発掘調査の成果をもとに西寺の伽藍配置を復原し、その中軸線と東寺の中軸線の距離を測り、平安京の造営尺を割り出した(文2-64)。発掘調査の成果をもとに条坊復原を行う平安京跡研究の基礎を提示されたことは、平安京跡研究では画期的なことであった。平安京研究にとって、発掘調査にもとづく重要な成果をあげ、将来展望を見据える成果を生み出した。この調査が発掘調査にもとづく実質的戦後平安京跡調査研究の始まりとなった。

平安宮内裏内郭回廊の基壇 (財)古代学協会は平安宮跡や羅城門跡の発掘調査を実施するが、しばらくは大きな成果を上げることはできなかった。昭和44年(1969)2月になって平安宮内裏内郭回廊の基壇を検出し、ようやく平安宮跡の本格的な遺構に遭遇する(文2-10)。

平安時代中期の瓦の研究 昭和44年(1969)4月、木村捷三郎氏は、瓦資料の増加に伴い、平安時代中期の瓦の考察を行い発表される(文2-65)。

坂東善平氏の研究 昭和36年(1961)から昭和45年(1970)、この期間で忘れてならないのは、在野の考古学者である坂東善平氏の活躍である。氏は『古代学研究』、『古代文化』紙上に、工事中に採取した平安京跡の遺物を盛んに紹介される(文2-24~51)。土器を含め多彩な遺物が報告される。この時期、行政や研究組織がカバーしきれない調査を、在野の考古学者として地道な平安京跡の研究を進められた坂東氏の活躍を忘れてはならない。まだ十分に組織的に対応できない時代に、平安京跡の遺物を精力的に紹介された平安京跡研究のパイオニアとして評価すべきだろう。

平安京跡研究の現状 昭和42年(1967)8月、考古学の体系本である『日本の考古学』河出書房新社が出版されるが、鈴木充氏は「平安京の変遷」のなかで、平安京跡の遺跡調査の内容には触られていない。平安京跡の調査成果は、まだ断片的で発掘資料から平安京を論じるには、資料的制約が多くあえて避けられたのであろう。まだ発掘調査があまり進んでいないこの時期の調査と研究の現状を反映している(文2-66)。

昭和41年(1966)11月、大規模な開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が全国的に行われるようになり、行政上の関連法規と事務手続き、発掘調査実務のマニュアルが一冊の発掘調査の手引き書としてまとめられた(文2-67)。しかし、開発が進むなか、平安京跡研究の現状は、一部の平安京跡出土の瓦や西寺跡調査にもとづく条坊研究にとどまっていた。

始まった普及啓発

平安博物館の開館 昭和43年(1968)5月、(財)古代学協会の施設として平安博物館が開館する(文2-60)。平安京が重要なテーマとなり、平安博物館開館展に坂東氏蔵品の瓦、土器が出品される。この頃から坂東氏の蔵品が各地で展示される。昭和44年(1969)6月、大阪市立博物館にも瓦が出品される(文2-68)。平安京跡の普及啓発活動は、徐々ではあったが平安博物館を起点に始められたことは、特筆すべきことであった。

3 . 都市再開発と平安京跡 [昭和46年(1971)～昭和51年(1976)]

1 増大する発掘調査

(財)古代学協会の調査

平安宮 昭和46年(1971)9～10月、平安宮跡の下水道工事に伴う立会調査が前年より引き続き行われ、朝堂院の延祿堂、修式堂の延石列が検出される。内裏につづいて朝堂院の遺構も部分的には残存していることが判明した(文3-1)。

昭和47年(1972)3月、二条保育園の敷地で、緑釉瓦を多く伴う瓦溜が検出される(文3-2)。

7～8月、左馬寮跡(文3-3)、内膳地域内の調査が行われた(文3-4)。

昭和48年(1973)4月、神祇官跡の立会調査(文3-5)、豊楽院跡の発掘調査が行われる(文3-6)。

5～6月、太政官跡の発掘調査で、平安時代の瓦片、土器片が出土する(文3-7)。

8月、内裏内郭回廊の基壇が27m以上続くことが確認された(文3-8)。

9～10月、良好に残存する民部省の築地が検出される(文3-9)。

昭和49年(1974)2～3月、内裏跡の発掘調査が行われ、多量の軒瓦が出土する(文3-10)。

3月、朝堂院東回廊の発掘調査で「右坊」の刻印のある文字瓦が出土する(文3-11)。

5月、朝堂院白虎楼付近から多量の緑釉瓦が出土し、緑釉の鴟尾が含まれる(文3-12)。

7～9月、発掘調査で、内裏蘭林坊の築地の一画が検出される(文3-13)。

9～10月、左兵衛町跡の発掘調査で溝が検出された(文3-14)。

昭和50年(1975)10～12月、大極殿跡の発掘調査では、江戸時代以後の聚楽土採取によって平安時代の遺構の検出はなかった。この発掘調査によって、大極殿付近は遺構の残りがよくないことがわかる(文3-15)。

7月、平安宮朝堂院大極殿跡で、平安時代の古瓦20数点を採集する(文3-16)。

左京 昭和47年(1972)1月、創建時と思われる東寺の築地基壇が確認される(文3-17)。

5月、京都新聞社社屋増改築に伴い、民間の原因者負担で、少将井遺跡を発掘調査する(文3-18)。民間による原因者負担の発掘がこれ以後、盛んに行われる。

10月、竹三条殿跡が発掘調査され、平安時代から中世以降の遺構、遺物が検出される(文3-19)。

12月、東五条第遺跡(文3-20)などの発掘調査が行われるが、目立った成果をあげることはできなかった。

昭和48年(1973)3～4月、三条西殿の北部、東北部を対象に三条西殿跡が発掘される。中・近世の遺構が検出され、近世の陶磁器が出土する(文3-21)。

昭和49年(1974)11～翌年5月、六角堂跡の発掘調査が行われ、中・近世の遺構とともに、近世陶磁器が多量に出土した(文3-22)。

昭和50年(1975)1月、平安京東北隅の一条大路、東京極大路の調査が行われる(文3-23)。

6～11月、中京郵便局新築敷地の発掘調査が行われ、東洞院大路の東側溝が検出される。自然

流路から縄文時代後期末の土器が出土する(文3-24)。

11月、平安京一条大路跡の2次調査が行われるが、一条大路北限の遺構は検出されず(文3-25)。

昭和51年(1976)2～3月、中京郵便局新築敷地の第2次調査でも東洞院大路の東側溝が検出される(文3-26)。

京都市文化財保護課の調査

平安宮 昭和48年(1973)4月、京都市文化財保護課に技師が新たに採用され、国庫補助を受け、平安宮東・南限の発掘調査(文3-27)、内膳司跡(文3-28)、大宿直跡(文3-29)、中和院跡(文3-30)などの発掘調査が文化財保護課独自で次々に行われる。

昭和49年(1974)7月、内裏跡の調査が行われ、平安時代後期の軒瓦が多量に出土した(文3-31)。

9月、造酒司跡が調査されるが、わずかの瓦片が出土するにとどまる(文3-32)。

12～翌年1月、中和院跡の調査では、平安時代の土壌から大量の土器とともに、針金状の金糸が出土した(文3-33)。

昭和50年(1975)7～8月、小安殿跡が調査され、平安時代の軒瓦11点が出土する(文3-34)。真言院跡が調査され、土壌内から平安時代の大量の瓦が出土した(文3-35)。

11～12月、太政官跡が調査されたが、近世の土壌から凝灰岩の切石が出土するにとどまった(文3-36)。

昭和51年(1976)1月、会昌門跡が調査され、平安時代後期の瓦溜が検出される(文3-37)。

3月、小安殿跡2次調査が調査されるが、平安時代の遺構は検出されなかった(文3-38)。3～4月、朝堂院暉章堂跡の発掘調査が行われる(文3-39)。

4月、豊楽院正殿である豊楽殿が調査され、豊楽殿基壇の一部と柱跡の根固め石が検出される(文3-40)。

5月、平安宮朝堂院跡で瓦溜が検出され、平安時代の多量の軒瓦が出土する(文3-41)。

右京(西寺) 昭和47年(1972)11～12月、西寺食堂跡北西に位置する大炊殿跡で、礎石下の根石を検出。古墳時代の土器が出土する。第5次調査(文3-42)。

昭和48年(1973)9月、西寺小子房跡が検出される。第7次調査(文3-43)。

昭和49年(1974)6月、史跡西寺跡が発掘調査され、西寺北僧房の礎石採取穴が検出される。第9次調査(文3-44)。

右京 昭和51年(1976)5月、右京一条二坊、右兵衛町跡の立会調査で、平安時代中期、後期の軒瓦が出土する(文3-45)。

羅城門 昭和47年(1972)2月、羅城門跡が発掘調査される(文3-46)。

京都府教育委員会の調査

左京 昭和48年(1973)1～2月、平安京修理式町の遺跡が独自で発掘調査され、平安時代の南北に続く柵列や中・近世の井戸などが検出される(文3-47)。

7～12月、内膳町遺跡では、弥生時代前期の土器や石器が検出され、京内にも弥生時代の遺跡が立地することが証明される(文3-48)。

山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査会の調査

右京 昭和47年(1972)7～8月、平安京右京四条一坊、朱雀院の発掘調査が行われたが、遺構は発見されず。平安時代後期の軒瓦が若干出土した(文3-49)。戦前の昭和2年(1927)に行われた「淳和院跡」以来の西寺以外の右京の発掘調査である。

12月、西高瀬川の東岸の橋脚下で、5個の礎石が見つかる(文3-49)。

昭和48年(1973)3～4月、朱雀大路跡を発掘されるが遺構を検出できず。立会調査でも目立った遺構は検出されなかった(文3-49)。

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会の調査

左京 昭和49年(1974)6月、試掘調査が開始される。烏丸通仏光寺付近で、弥生時代末期の土器が出土する。烏丸綾小路遺跡発見の契機となる(文3-50)。烏丸通押小路付近で、室町時代前期の土壌からいわゆる「ヘソ皿」を多く含む土師器皿が出土する(文3-51)。烏丸通六角付近で、室町時代の土層から鉄釉の茶入れが出土する(文3-52)。6～7月、烏丸通中立売付近で、土壌内から桃山時代の金箔瓦5点、土師器皿、盤、瓦器鉢、漆器椀、木製品箸、桶側板、球などが出土する(文3-53)。6～8月、一条通以北で、室町時代末期の溝、土壌などが検出される。弥生時代前期の土器片が出土する(文3-54)。

7～8月、烏丸通出水付近で、桃山時代の遺物が土壌内から多量に出土する。室町時代の土師器皿を一括投棄した土壌が検出される(文3-55)。これら6箇所の試掘調査で、烏丸通下の平安京跡は、下層に平安時代以前の遺跡があり、平安時代以後も連続して遺構が存在することが明らかになった。

9～10月、京外の烏丸通上立売付近と烏丸通一条上ルで、室町時代末期の土壌、溝が検出される(文3-56・57)。一条大路南側溝と推定される溝が検出され、室町時代前期の土壌からは瓦器碗、鍋、羽釜などが一括して出土した(文3-58)。

11～12月、烏丸通上御霊上ルの京外で、江戸時代前期の河原石を組んで作られた溝が検出され、石組には一石五輪塔が組み込まれていた(文3-59)。烏丸通一条上ルで、一条大路北側溝の可能性のある溝が検出され、平安時代中期の土器がまとまって出土した(文3-60)。室町時代の土壌も検出され、瓦器の羽釜が出土する(文3-61)。

昭和50年(1975)2月、烏丸通中立売付近で、烏丸通の側溝に石仏などを石材に転用した石組が検出される(文3-62)。2～3月、烏丸通榎木町付近で、石仏を始め多数の石造物を組み込んだ石垣が検出され、織田信長が築造した旧二条城の石垣ではないかと注目を集める(文3-63)。烏丸通中立売付近で、桃山時代の烏丸通東側溝の東壁石組が検出される。石仏、五輪塔などが石材に転用され、五輪塔には「長禄三年(1459)」の銘がある。溝内から木製品、漆器、土器、銭貨など多量の遺物が出土する。下層には、弥生土器(一様式)、縄文土器(晩期)を含む遺物包含層があった(文3-64)。烏丸通出水付近で、江戸時代の土取り穴が検出される(文3-65)。

3月、烏丸通中立売付近で、引き続き桃山時代の烏丸通東側溝の石組の溝が検出される(文3-66)。

4月、烏丸通上長者町付近で、桃山時代の烏丸通の石組側溝が検出される。この側溝は少なくとも中立売通～上長者町通間、約100mは続くことを確認。溝内から下駄、箸、漆器などの木製品、土器、金箔瓦、鹿骨、銭貨などが出土する(文3-67)。

5～6月、烏丸通竹屋町付近の大炊御門大路南溝推定位置で、室町時代後期の溝が検出される。中世以後の建物礎石、石組遺構、土壌などを検出する(文3-68)。烏丸通竹屋町下ルで、遺物包含層から平安時代前期の土器がまとまって出土する。鎌倉時代から江戸時代までの井戸、土壌、ピットなども検出される(文3-69)。烏丸通二条付近の二条大路の推定位置から室町時代後期の濠が検出される。桃山時代の金箔瓦が出土する(文3-70)。烏丸通押小路付近で、室町時代後期の濠が検出される(文3-71)。

6～7月、烏丸通出水付近で、上下に重なった石組の溝が検出される。上の石組溝からは、江戸時代後期の遺物が、下の石組溝からは江戸時代前期の遺物が出土した。下の石組溝には石仏が石材に転用される(文3-72)。烏丸通出水付近で、瓦器羽釜、土師器皿を多く含む室町時代後期の土壌が検出される。鎌倉時代の遺物を含む土壌もあった(文3-73)。烏丸通中立売付近で、平安時代中期の土器を多く含む土壌が検出される。室町時代後期の土壌も多数検出されたが、なかに火を受けた骨を検出した土壌もある(文3-74)。烏丸通榎木町で、濠のコーナー部にあたる北西から南東に延びる旧二条城の石垣の続きが検出される。この石垣にも石造物が転用される(文3-75)。烏丸通榎木町で、旧二条城の南面の石垣に対応する北面の石垣を検出される。石垣間の距離は約27m。礎石を石材に転用した室町時代後期の東西方向の溝が検出される。近世の土壌から中期の縄文土器が出土する(文3-76)。

7月、烏丸通上長者町付近で、石造物を転用した東西方向の石組溝が検出される。溝は上下に分かれる(文3-77)。7～8月、烏丸通一条付近で、室町時代末期の土壌が検出される。想定した一条大路の南側溝は検出できず(文3-78)。

8～9月、烏丸通竹屋町付近で、桃山時代の土壌から土師器、陶磁器が一括して出土する。平安時代後期の土壌も検出される(文3-79)。烏丸通竹屋町付近で、平安時代後期から江戸時代の土壌、井戸などが検出される。桃山時代の土壌からは志野茶碗が出土した(文3-80)。烏丸通二条付近で、室町時代後期の建物に関連するピット、桃山時代から江戸時代の井戸、土壌が多数検出される。桃山時代の土壌から金箔瓦が出土した(文3-81)。

10～11月、京外の四箇所が発掘調査が行われ、烏丸通鞍馬口付近で、江戸時代以後の落込みから土師器の細片が極少量出土し(文3-82)、烏丸通上御霊付近で、奈良時代の土師器、須恵器が出土した(文3-83)。烏丸通寺ノ内付近では、室町時代末期の石垣を伴う濠が検出され、土壌内からは伏見人形がまとまって出土した(文3-84)。烏丸通上立売付近では、室町時代末期の土壌、溝が検出された(文3-85)。この一連の発掘調査で、京外にも遺跡が拡がり、とくに室町時代の遺跡が広く分布することが証明され、中世以後の京都の発展を考えるうえで示唆的であった。

11～12月、烏丸通的場付近で、大量の平安時代後期の瓦が出土する。軒丸瓦101点、軒平瓦127点を数える。整合する各時期の層位が確認される(文3-86)。烏丸通花屋町付近で、室町時代前期

以後の井戸、土壌、石組遺構などが検出される(文3-87)。

昭和51年(1976)1月、烏丸通一条付近で、平安時代前期の遺物を土壌内から多量に採取する(文3-88)。1～3月、東本願寺前の烏丸通は、中世の墓跡であることがわかる(文3-89)。また平安時代の七条坊門小路が検出される(文3-90)。

2～3月、烏丸通万寿寺付近で、平安時代末期から江戸時代の遺構が検出される。井戸、土壌、溝などがある(文3-91)。烏丸通武者小路付近の立会調査で、土取り穴と考えられる土壌が検出される(文3-92)。

4～5月、烏丸通榎木町付近で、平安時代後期から江戸時代の土壌が検出される(文3-93)。烏丸通出水付近で、桃山時代後半から江戸時代の烏丸通路路面、石組側溝、江戸時代前期の井戸、ピットが検出される。多量の遺物が出土した桃山時代後半の土壌、落込みが検出される(文3-94)。桃山時代後半から江戸時代後期まで、烏丸通出水の道路交差点部の変遷が明らかになる。旧二条城の濠、暗渠が発掘され、石仏、金箔瓦などが出土する(文3-95)。

5～6月、烏丸通松原付近で、平安時代後期から江戸時代までの土壌が検出される。鎌倉時代後半の石組の井戸が検出される(文3-96)。烏丸通下立売付近で、桃山時代から江戸時代前期の遺物包含層が検出され、平安時代、室町時代の土壌も検出される(文3-97)。5～7月、烏丸通万寿寺付近で、平安時代中期の土壌、ピット、樋口小路の北側溝が検出される(文3-98)。

6～7月、京外の烏丸通上立売付近で、明治、大正期の井戸が検出される。「赤玉ポートワイン」のピンが出土する。室町時代後期の土壌、溝、桃山時代の土壌も検出される(文3-99)。烏丸通出水付近で、桃山時代後半から江戸時代後期の烏丸通の東溝および出水通の路面が検出される(文3-100)。

7～9月、烏丸通綾小路付近で、平安時代後期から江戸時代の遺構が検出され、常滑の大甕が出土する。弥生時代末期の溝も検出される(文3-101)。烏丸通仏光寺付近で、平安時代中期の井戸、平安時代後期から桃山時代の土壌が検出される(文3-102)。同じく烏丸通仏光寺付近で、平安時代前期から江戸時代までの土壌、井戸、ピットが検出される(文3-103)。烏丸通高辻付近で、平安時代後期から明治時代までの土壌が検出される。平安時代後期の井戸も検出される(文3-104)。烏丸通五条付近で、平安時代中期から江戸時代までの土壌、井戸、ピットが検出される。「め め め」と連続的に記す平安時代末期の墨書土器が出土する(文3-105)。

8月、烏丸通寺ノ内付近で、室町時代後期、桃山時代の溝が検出される(文3-106)。8～9月、烏丸通出水交差点部の桃山時代後半から江戸時代の道路側溝、暗渠が明らかになる。桃山時代の旧二条城の濠も検出される(文3-107)。

10～12月、烏丸通榎木町付近で、南面する旧二条城の石垣、犬走り、濠底部が検出される(文3-108)。旧二条城の北面する石垣、犬走り、濠底部も検出される(文3-109)。

11～12月、烏丸通楊梅付近で、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代と続く楊梅小路が検出される(文3-110)。烏丸通鍵屋町付近で、平安時代前期から江戸時代までの遺物包含層、井戸、土壌などが検出される(文3-111)。烏丸通の場付近で、平安時代中期から江戸時代までの遺構、遺物を

検出する(文3-112)。烏丸通六条付近で、平安時代後期から室町時代まで続く六条大路の路面、北側溝が検出される(文3-113)。

12月、烏丸通寺ノ内付近の覆工板下の調査で、室町時代後期の石組井戸、土壌、落込み、ピット、溝などが検出される(文3-114)。烏丸通下立売付近の覆工板下で、旧二条城の石垣、犬走りを検出する。多数の石仏が出土する(文3-115)。12月に入ると、覆工板の下での発掘調査が始まり、ますます烏丸通下の調査は佳境に入る。

平安京調査会の調査

平安宮 昭和51年(1976)4月、丸太町通円町～千本通丸太町間で、丸太町通中央部で平安時代の瓦溜が検出される(文3-116)。

左京 昭和48年(1973)2月、平安京調査会が初めて、八条通の拡張工事に伴って発掘調査を行い、平安時代前期の整地層が検出される(文3-117)。

4～7月、左京六条一坊の専売公社跡地で、中世の井戸が検出される(文3-117)。

昭和49年(1974)7～11月、左京四条一坊の発掘調査が行われる。この調査は左京域を対象にした初めての大規模発掘調査であった。平安時代から鎌倉時代の四条坊門小路が検出され、両側溝、路面が良好に残存していた。平安時代前期の「秋野方」と記された木製人形や、木簡などが発見される(文3-118)。

昭和51年(1976)5月、東市跡で平安時代の井戸が検出される(文3-119)。

6～7月、左京八条四坊で鴨川の氾濫層が検出される(文3-120)。

8月、旧丹波口駅の北側で、濠から江戸時代の土器や陶磁器、下駄など木製品などが出土する(文3-121)。

右京 昭和48年(1973)10～12月、朱雀院跡の発掘調査では、平安時代前期の朱雀院の本格的な掘立柱建物が検出され、前期の建物遺構が残存していた(文3-122)。

昭和50年(1975)8～11月、右京四条二坊、西宮領跡にあたる四条通御前角の四条車庫跡地で発掘調査が行われる。西大宮大路の側溝や路面が検出され、路面に轍の跡が残っていた。側溝からは、中国湖南省長沙窯の黄釉褐彩水注片が出土し、平安京と中国との交易を示す資料である(文3-123)。

鳥羽離宮跡調査研究所の調査

左京 昭和50年(1975)6～8月、東寺の南大門の前で、東寺の中世の濠が検出される(文3-124)。

7～9月、平安京左京の調査である京都法務合同庁舎新営地の調査では、中世の井戸や建物跡が検出される(文3-125)。

右京(西寺) 昭和48年(1973)7～8月、史跡西寺の第6次調査が行われる。西寺中門の位置をつかみ、回廊の位置を確認して、新築する小学校校舎を西寺の主要伽藍からはずすことを目的にされた(文3-126)。

昭和49年(1974)5～6月、第8次調査では、西寺中門に取りつく東回廊跡が検出される(文3-

127)。

右京 昭和49年(1974)7～翌年9月、平安京右京、住宅公団花園団地建設敷地の発掘調査では、土御門大路と木辻大路の交差部が明らかになり、一条大路の側溝の検出も加わり、平安京全体の振れが修正された。この発掘調査によって、2500分の1の地図上に平安京条坊図をより正確に画くことが可能となる(文3-128)。

六勝寺研究会・その他の調査

平安宮 昭和50年(1975)2～4月、江谷寛氏は「平安宮跡発掘調査団」を組織し、平安宮跡の発掘調査を行い、平安時代の瓦や聚楽第の金箔瓦が出土した(文3-129)。

7月、平安宮西院跡を発掘調査するが、遺構は検出されなかった(文3-130)。

右京 昭和48年(1973)12月、木村捷三郎氏を代表とする六勝寺研究会は、大將軍神社境内で、一条大路を確認する発掘調査を行うが、一条大路に関連する遺構の検出は見なかった(文3-131)。

(財)京都市埋蔵文化財研究所の調査

平安宮 昭和51年(1976)12～翌年1月、内蔵寮の発掘調査が行われたが、近世の遺物が出土するにとどまった(文3-132)。

右京 昭和51年(1976)11月、右京六条二坊で発掘調査が行われ、古墳時代の溝、平安時代の西韮負小路が検出される(文3-133)。

各大学の調査

左京(同志社大学) 昭和48年(1973)3～4月、同志社大学が南蛮寺跡の発掘調査を行い、裏面にキリスト教の儀式を表した人物画を描く石製硯が出土する。南蛮寺に関するものとして注目された。8月、概要報告が刊行される(文3-134)。

昭和50年(1975)8月、中京区六角町遺跡、平安京左京の発掘調査が行われ、ごみ捨て穴から桃山時代を中心に各時代の遺物が出土した(文3-135)。

左京(龍谷大学) 昭和49年(1974)12～翌年2月、龍谷大学は大宮学舎の敷地で、平安京東市跡の発掘調査を行う。平安時代後期の井戸、室町時代の井戸、大宮大路と推定する側溝が検出される(文3-136)。

昭和51年(1976)7月、大宮学舎の敷地で、発掘調査を行う。近世の土壌や瓦溜などが検出される。近世の陶磁器、泥面子が多数出土した(文3-137)。

左京(花園大学) 昭和50年(1975)8月、花園大学考古学研究会は、護王神社境内で発掘調査を行うが、江戸時代の遺構の検出にとどまった(文3-138)。

右京(花園大学) 昭和51年(1976)10～11月、花園大学発掘調査委員会が組織され、大学構内で発掘調査が行われる。平安時代前期の建物、古墳時代後期の竪穴住居跡などの検出を見た。竪穴住居跡の検出は、右京域にも平安京以前の遺構が存在することを示し、秦氏に関連する遺構ではないかと注目された(文3-139)。

2 調査の成果
わかり始めた平安京跡

平安京成立以前の遺跡 遺跡地図が刊行された昭和47年(1972)以降、発掘調査の件数は、市街地の再開発に対応して、急激に増大した。各調査組織は、発掘調査を実施するのが精一杯で、整理、報告する時間的余裕は、ほとんどなく、とりあえず記録保存をめざすという緊急対応調査の連続であった。

しかし一方で、平安京跡の様相が見え始めた時代でもあった。掘れば、平安時代に限らず各時代の遺跡が重複していることがわかり始めた。

下層には、縄文時代や弥生時代、古墳時代の遺跡が立地していることも明らかになり、平安京成立以前の京都盆地の様相も見え始めた。内膳町遺跡の弥生時代前期の土器や石器の検出はその好例であった。それは調査研究の今後の課題と研究分野の広がりを示すものであった。

部分的に残る平安宮跡 平安宮跡では、内裏内郭回廊跡、朝堂院修式堂、延祿堂の延石の検出、豊楽院正殿である豊楽殿の礎石抜き取り穴の検出、民部省の築地跡などが検出され、全体としては、平安宮跡の遺構残存は良くないが、部分的には内裏跡や豊楽院跡など、良好に残る区域があることがわかった。それは平安宮跡調査に期待が持てることを示すものであった。

相次ぐ街路の検出 街路の調査では、七条坊門小路、四条坊門小路などが路面、側溝を伴って検出され、右京では、西大宮大路の検出など、街路の検出が相次ぎ、平安京条坊復原にとって、定点になるような成果を生み出すことができたことも将来につながる大きなことであった。

中世以後の平安京跡 地下鉄烏丸線の調査で、織田信長が築城した旧二条城の石垣と濠が検出された。それは平安時代に限らず、中世以降も平安京跡には重要な遺構が存在することを示し、地下鉄烏丸線の調査は、平安京跡の重層性をあらためて認識させられる調査であった。

3 出発した京都市埋蔵文化財行政 京都市の埋蔵文化財行政

京都市遺跡地図の発刊 昭和45年(1970)10月に発刊された『京都の歴史』第1巻の付図の平安京図が、平安京跡発掘の行政指導の根拠として使われていたが、昭和47年(1972)11月、京都市遺跡地図が出版され(文3-140)、この遺跡地図の公開によって、平安京跡は埋蔵文化財として正式に登録され、行政指導されるようになる。当時、市街地再開発と埋蔵文化財調査をどう調和させるか行政にとっては、緊急の課題であり研究者にとっては、平安京跡の調査を本格的に取り組める大きなチャンスでもあった。

発掘調査は、遺跡地図が公開される昭和47年(1972)11月以降飛躍的に拡大する。京都市は都市再開発に対応して、周知の埋蔵文化財包蔵地で建設工事を行う場合、開発者は届け出を行い、京都市の行政指導によってチェックを受けるシステムをつくりあげた。行政指導を平安京跡全域に広げ、記録保存に本腰を入れ始めたのである。昭和49年(1974)8月には、遺跡地図の改訂が行われる(文3-141)。

埋蔵文化財技師の誕生 昭和46年(1971)、全国的に高度経済成長のさなかにあり、埋蔵文化財の破壊が全国的に進行していた(文3-142)。埋蔵文化財の保護は、文化庁にとっても緊急の課題であった。11月、文化庁と建設省の協議がまとまり、「建設省がおこなう道路事業の建設工事に伴う

埋蔵文化財の取扱いについて」が文化庁文化財保護部長から各都道府県の教育委員会教育長に通知され、発掘調査費、整理保存費の負担が建設省側にあることが明確になった(文3-143)。

昭和46年(1971)4月、京都市文化財保護課に浪貝毅氏が埋蔵文化財技師として着任する(文3-144)と、昭和47年(1972)2月、京都市文化観光資源調査会が設立される(文3-145)。昭和48年(1973)、国庫補助事業による調査が継続的に実施されるようになる。

公共の原因者 昭和47年(1972)5月には、京都市の公共事業である山陰線高架工事に先がけて、山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査会が設立される。この山陰線高架工事に伴う埋蔵文化財調査会は、京都市歴史資料館が受け皿となって設立され、調査団が生まれ、京都駅から二条駅までの工事区間を調査の対象とした(文3-146)。京都市が原因となる公共工事による調査委託契約の始まりであった。

これ以後、公共事業が原因となる埋蔵文化財調査は、京都市が責任を持つことになった。また京都駅から二条駅までの京域が調査の対象であり、それまでは平安宮跡や西寺跡のみが埋蔵文化財として扱われていたが、京域全体を埋蔵文化財として扱うことになった。

地下鉄烏丸線建設に伴う埋蔵文化財調査 昭和46年(1971)10月、地下鉄烏丸線建設に伴う埋蔵文化財調査の計画案が提出され、昭和47年(1972)、正式に京都市文化観光資源調査会埋蔵文化財部会に取り上げられ協議が始まる(文3-147)。

昭和48年(1973)3月、京都市文化観光局から平安京跡に対する保護、調査の基本構想が発表される(文3-148)。10月、京都会館会議場で、烏丸通の地下鉄工事に先立って、公開講演会、説明会が開催され、12月、京都市文化観光資源調査会は、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会の設置を決め、昭和49年(1974)1月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会は発足する(文3-147)。

緊急対応の発掘 (財)古代学協会は、昭和32年(1957)以来、平安京跡の発掘調査をすでに実施していたが、昭和48年(1973)には、杉山信三氏を代表とする鳥羽離宮跡を調査していた鳥羽離宮跡調査研究所が、史跡西寺跡を発掘調査する(文3-126)。昭和48年(1973)2月、田辺昭三氏を代表とする平安京調査会が発足する(文3-149)。2月末には平安京調査会は、京都市建設局の公共事業である八条通の拡張に伴う遺跡調査を実施した(文3-117)。3月には同志社大学が(文3-134)、12月には、木村捷三郎氏を代表とする六勝寺跡を中心に調査していた六勝寺研究会が、平安京跡を発掘調査するようになる(文3-131)。京都市文化財保護課も昭和48年(1973)から発掘調査を独自に実施する(文3-150)。

都市再開発による平安京跡発掘は、増大の一途をたどり、活発な行政指導のもとに各団体が調査を行うようになるが、開発に対してとりあえず、緊急に対応し、調査することが課題の時代であった。調査内容の粗密もあり、経済上、組織上の問題も多く、調査運営に混乱をきたすこともあり、しだいに平安京跡発掘の組織統一、記録方法の確立が求められるようになる。

(財)京都市埋蔵文化財研究所の設立 京都市はこの問題を解決すべく京都府に働きかけ、(財)京都市埋蔵文化財研究所の設立に動く。昭和51年(1976)10月、京都府教育委員会は、(財)京都市埋蔵文化財研究所の設立を認可し(文3-151)、11月、平安京調査会、六勝寺研究会、鳥羽離宮跡調

査研究所の3団体が母体となって、(財)京都市埋蔵文化財研究所が設立される(文3-152)。

4 遺跡保護と調査体制 遺跡保護の動き

遺跡を守る普及啓発 昭和46年(1971)12月、日本考古学協会が『埋蔵文化財白書』を公刊する(文3-142)。全国規模で埋蔵文化財の破壊が急激に進んでいたからである。昭和40年(1965)後半代の普及啓発活動は、遺跡を如何に破壊から守るかが焦点であった。多くの研究者が平安京跡の重要性を各種紙面で訴えられる。遺跡や遺物内容を深く理解する普及啓発活動の前に、遺跡を守る普及啓発活動が重要で、それが先行する時期であった。昭和48年(1973)10月、地下鉄烏丸線建設に先立って、京都会館会議場で、遺跡を守る視点から「烏丸通の埋蔵文化財について」の公開講演会、説明会が開催された(文3-147)。

研究者の遺跡保護 昭和46年(1971)9月、森浩一氏、坂詰秀一氏は、歴史考古学の分野で将来、平安京が大きなウエイトを占めるという認識を示し(文3-153)、昭和48年(1973)、伊藤玄三氏は、平安京跡の発掘で検出した重要な遺構は保存され、活用されることが望ましいと主張される(文3-154)。また、大石良材氏は、昭和48年(1973)4月、開発に対処するためにも平安宮の復原案が必要であると述べ、復原案が作成されている(文3-155)。浪貝毅氏は12月、京都市の埋蔵文化財行政の経過と実情を述べられ、埋蔵文化財の重要性を訴えられた(文3-156)。

地下鉄烏丸線の工事が日程にのぼってくると、昭和48年(1973)4月、森浩一氏は平安京跡の調査を問題にし、平安京跡の開発によって破壊が進む実情を訴えられた(文3-157)。地下鉄烏丸線の建設は、その格好の題材であった。発掘調査に参加すれば、行政の隠れみものになると持論を展開する学者もいた。発掘調査は、開発か、保存かの瀬戸際にたつことになる。しかし、地下鉄烏丸線の建設に先行して、平安京跡を南北に縦断して発掘調査ができれば、平安京を解明する絶好の機会でもあった。論議では、烏丸通全面、烏丸通片側を発掘調査する案が検討されたが、一日約5万台の車が、走行し、営業活動も活発な烏丸通を発掘するには、営業補償のこともあり、実際上不可能という意見もあった。

そこで、浮上した案がトレンチによる発掘調査と立会調査の併用案である。道路中央部にトレンチを開け、両側の一車線を確保しながら、中央のトレンチをつないで行き、周辺は立会調査で補う方法であった。このような市街地に立地する遺跡の調査法を提示することによって、妥協点を見出し、開発と埋蔵文化財調査の調和がはかられた。地下鉄烏丸線の調査は昭和49年(1974)6月から始まる(文3-158)。

分布調査 遺跡破壊に直面していたこの時期、瓦窯跡や須恵器窯など平安跡と関連する岩倉幡枝、本山地区の遺跡分布調査を昭和46年(1971)2月、同志社大学文化史専攻のグループが実施し(文3-159)、京都産業大学の考古学部は、クラブ活動で、西賀茂地区の分布調査を行い、昭和51年(1976)3月にその結果を報告書としてまとめている(文3-160)。こうした動きは、開発される前に、事前に遺跡を把握しておきたいという学生たちの遺跡保護への率直な意志の現れでもあった。

遺跡調査法の提示

市街地における遺跡調査法 昭和50年(1975)10月、『平安京跡発掘調査報告 - 左京四条一坊 - 』が平安京調査会から発刊される(文3-118)。そのなかで、田辺昭三氏は、「平安京域内はすべて遺跡であるという原則にたち、調査の対象とすべきである。点に近い遺跡の幾つかを線につないで線の認識に高め、更に線と線を合わせて面の認識にまで発展させるべきである」と述べる。この見解は、従来調査が不可能と考えられがちな市街地の遺跡調査法を確立させ、都市開発に現実的対応を可能にする調査の方向性を示した。

試行錯誤の時代 昭和46年(1971)から昭和51年(1976)の間、積極的に京都市の埋蔵文化財行政にまい進されたのが浪貝毅氏である。氏の努力と活躍がなければ、こうした一連の行政指導を行い、埋蔵文化財の組織確立を果たせなかったと言える。一方で、渾沌とする開発の波にもまれながら、緊急対策として発掘調査が実施されたのも事実である。(財)古代学協会や各任意団体は、激増する平安京跡調査の受け皿として、この時期フル回転の状況であり、平安京跡の発掘調査は、緊急対応調査の性格が強かった。

別の視点でいえば、埋蔵文化財行政をいかに確立するか、平安京跡の調査研究と今後どう向き合うか、試行錯誤の時代でもあった。また、行政の役割が拡大して、開発と調査研究とどう調和させるのか、遺跡調査法を模索しながら平安京跡の調査研究どう進めるのか、将来を決める重要な時期でもあった。

5 都市再開発下の研究活動と普及啓発 研究と報告

瓦の研究 昭和48年(1973)3月、近藤喬一氏は、西賀茂、東幡枝の窯跡出土の文字瓦を扱い、平安宮跡出土の瓦との比較から、文字瓦の盛行年代を考定する論文を(文3-161)、伊藤玄三氏は、平安宮の搬入瓦の分析に関する論文を発表される(文3-162)。昭和50年(1975)4月、高橋美久二氏は、平安時代後期の地方瓦が京都へ供給されていることを(文3-163)、12月には淀の宮前橋の下流約500mで、採取された平安時代後期瓦を淀津との関連で紹介されている(文3-164)。

昭和50年(1975)7月、木村捷三郎氏は、官窯グループにはいる平安時代の「左」銘の瓦の性格についての論文(文3-165)を、12月には平安時代中期瓦についての見解を示す論文を公表される(文3-166)。

この時期の研究活動の特徴は、『土師式集成本編4』が刊行される(文3-167)が、まだ個別遺跡の土師器の紹介にとどまっており、土器編年の基軸を示すようなものではない。平安京跡から出土する平安時代の瓦についての個別研究が、主に行われていた。

報告書の刊行 昭和50年(1975)10月、平安京調査会によって、本格的な平安京左京の報告書が刊行される。『平安京跡発掘調査報告 - 左京四条一坊 - 』の報告書である(文3-118)。平安時代から鎌倉時代の四条坊門小路が検出され、両側溝、路面が良好に残存していた。それは実態にもとづく平安京条坊研究の展望を開くものであった。平安時代前期の「秋野方」と記された木製人形や、木簡の発見は、平安京跡の研究に木簡という文字資料を加え、「寛治五年」と記された紀年銘のある墨書土器の発見は、土器編年を行ううえで、絶対年代を与える格好の資料であった。これ

らは、平安京跡研究の基礎を提示、平安京跡が研究者、市民の期待に答えられる遺跡内容であることを示した。平安京跡を具体的に解明する時代に入りつつあることを意味していた。

昭和51年(1976)11月、(財)古代学協会の第1冊目の正報告書として、『平安宮大極殿跡の発掘調査 平安京跡発掘調査報告書』第1輯が発刊される(文3-15)。(財)古代学協会は、昭和32年(1957)11月から戦後初めて行われた勸学院跡の発掘調査以来、長年、平安京跡の発掘調査を実施してきた。第1冊目の正報告が発刊されたことは記念すべきことであった。

普及啓発の胎動

様々な普及啓発 昭和49年(1974)4月、『京都考古』第1号が発刊され、八木町の瓦窯跡が紹介されている(文3-168)。行政上の枠や、組織の制約を離れ、個人が自由に埋蔵文化財速報と資料紹介ができる場ができたことは、普及啓発を進めるうえで歓迎されるべきことであった。

昭和50年(1975)4～5月、二条城内で『古京展 - 飛鳥から平安まで』京都市・京都新聞社主催で、都城の展覧会が開催される。平安京跡出土の鬼瓦、鴟尾片、軒瓦、緑釉軒瓦、土器、漆器蓋、墨書土器、木簡、曲物、下駄等の木製品など、平安京跡の当事の最新の資料が展示された(文3-169)。

同年6月、東京国立博物館で、特別展覧「日本出土の中国陶磁」が開催される。平安京跡出土の輸入陶磁も展示され、中国との交易を示す具体的資料の提示であった(文3-170)。

昭和51年(1976)10月、最終巻の『京都の歴史』第10巻が刊行される。京都市民に京都の遺跡を含め、京都の歴史の全体像を示す貴重な普及啓発であるとも言えた(文3-171)。

昭和43年(1968)5月以降、平安博物館の活動は続いており、市民に平安時代の歴史を恒常的に普及啓発する施設として活用されていたが、市民に対してようやく他でも展覧会などが開催され、広く平安京跡の普及啓発が始まろうとしていた。昭和49年(1974)5月、林屋辰三郎氏は、地下鉄烏丸線建設の発掘に対して平安京解明に大きな期待があると述べた(文3-172)。

昭和50年(1975)2月、龍谷大学大宮学舎敷地で、平安時代後期の井戸、室町時代の井戸が検出され、現地説明会も行われている(文3-173)。

4. 平安京跡調査の展開 [昭和52年(1977)～昭和55年(1980)]

1 拡大する発掘調査

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会の調査

左京 昭和52年(1977)1～2月、烏丸通出水付近の覆工板下で発掘調査が行われ、旧二条城の石垣と濠が検出され、刀痕の残る頭蓋骨が出土した(文4-1)。烏丸通出水付近の立会調査では、平安時代中期の井戸が検出され、土器、陶磁器など多数の遺物が出土した(文4-2)。烏丸通綾小路付近でも、弥生時代末期の溝などが立会調査で検出された(文4-3)。1～3月、烏丸通の夷川通付近の2箇所、発掘調査が行われ、平安時代から江戸時代までの遺構、遺物が検出される(文4-4・5)。

2月、烏丸通楊梅付近では、楊梅小路の路面、側溝が検出され、平安時代後期の遺物包含層が

ら輸入陶磁器、土師器、瓦などが多数出土した(文4-6)。

3月、覆工板下の調査が烏丸五条付近で行われ、平安時代後期の六条坊門小路の路面と南側溝が検出される(文4-7)。

4～5月、立会調査で、平安時代中期から室町時代まで続く樋口小路が、烏丸通万寿寺付近で検出される(文4-8)。

5月、烏丸通楊梅付近の覆工板下の調査で、平安時代後期の遺物包含層から大量の瓦が出土する(文4-9)。5～6月、烏丸通姉小路付近で発掘調査が行われ、平安時代後期から江戸時代後期までの遺構、遺物が検出され、江戸時代前期の木製品や陶磁器が多量に出土する(文4-10)。

6月、烏丸通錦小路付近の発掘調査でも平安時代前期から江戸時代後期までの遺構、遺物が検出される(文4-11)。烏丸通蛸薬師付近の発掘調査で、平安時代後期から明治時代までの遺構が検出され、平安時代から室町時代の遺物包含層が検出される(文4-12)。烏丸通姉小路付近の発掘調査で、鎌倉時代から江戸時代までの遺構、遺物が検出される(文4-13)。烏丸通夷川付近の発掘調査で、平安時代後期の祭祀の痕跡である「息抜き」の竹を立てた井戸が検出される(文4-14)。6～7月、烏丸通三条付近の発掘調査で、室町時代後期以前から江戸時代まで続く三条大路の路面と北側溝が検出される(文4-15)。また烏丸通六角付近の発掘調査では、平安時代後期の六角小路の路面と北側溝が検出された(文4-16)。

7～9月、烏丸通榎木町付近の覆工板下の発掘調査で、旧二条城の石垣、濠が検出される。石垣に伴う胴木、濠底に造りだされた畦などが見られた(文4-17)。7～8月、京都駅前東部付近の発掘調査で、古墳時代、平安時代前期から中期の遺物を含む自然流路が検出された(文4-18)。

8月、烏丸通八条付近で、平安時代末期の井戸、鎌倉時代後期の土壌などが検出される(文4-19)。

10～11月、烏丸通木津屋橋付近の発掘調査で、平安時代前期、中期の遺物包含層から人面の木製品が出土する(文4-20)。10～12月、東本願寺前の烏丸通で、3箇所の特レンチによる発掘調査が行われ、中世の墓跡が検出される。東本願寺前帯が中世の墓跡群であることが明らかになった(文4-21～23)。平安時代後期から室町時代後期の北小路路面と側溝、江戸時代の阿弥陀堂筋の路面、側溝が検出される(文4-23)。

11月、烏丸通北大路付近で、発掘調査が行われる。平安時代から室町時代の遺物包含層が検出される。遺構の検出はなかった(文4-24)。

昭和53年(1978)1～2月、烏丸通丸太町付近の覆工板下の発掘調査で、東西方向の旧二条城の濠が検出される。濠の南側壁は素堀りで、北側壁は石垣である。濠幅は底部で5.5mで、石垣には石造物が転用されていた(文4-25)。

5月、烏丸通下数珠屋町付近の立会調査で、平安時代後期から室町時代後期まで続く北小路が検出される(文4-26)。5～6月、烏丸通正面付近の立会調査で、平安時代後期から室町時代前期まで続く七条坊門小路の路面と両側溝が検出される(文4-27)。

6～7月、烏丸通木津屋橋付近の立会調査で、平安時代後期から鎌倉時代の塩小路の路面と両

側溝が検出される(文4-28)。

7月、烏丸通花屋町付近の発掘調査で、平安時代後期から室町時代まで続く左女牛小路が検出される(文4-29)。

10月、烏丸通丸太町付近の立会調査で、中・近世の遺物包含層が検出される(文4-30)。

昭和54年(1979)7～9月、烏丸通楊梅付近で、調査面積78m²を58日間かけて発掘調査が行われる。重機を用いず実験的ではあったが、手掘りで20面の記録を残す発掘調査が行われた。平安時代前期から現代までの遺構、遺物が検出され、層位を追って綿密な発掘調査が行われた(文4-31)。

8～9月、烏丸通丸太町付近の発掘調査で、平安時代中期から江戸時代後期までの遺構、遺物が検出され、平安時代中期の土師器と須恵器壺を埋納した地鎮遺構が検出される(文4-32)。

9～11月、烏丸通今出川付近で、江戸時代前期の土壌から釉裏紅盤の破片が出土する(文4-33)。

11～翌年1月、烏丸綾小路付近の発掘調査で、弥生時代末期の竪穴住居跡、古墳時代後期の溝が検出される。烏丸綾小路遺跡で、初めての本格的な遺構検出となる。ほかにも平安時代後期から江戸時代までの遺構、遺物が検出された。各時期の遺物破片数が計算され、総破片が45,681片となった。時期別に遺物破片数を出し、比較することによって遺跡の性格や傾向をとらえようと試みられる(文4-34)。

この破片数を数え、土器組成を検討、比較することは、これ以後、中・近世の歴史考古学の分野で盛んに行われるようになり、全国的にこの方法が採用されて行く。

(財)京都市埋蔵文化財研究所の調査

平安宮 昭和52年(1977)1～3月、造酒司跡が発掘調査されるが、中・近世の遺構、遺物包含層が検出されるにとどまった(文4-35)。

3月、平安宮の東限の立会調査では、平安時代後期の遺物包含層が検出される(文4-36)。

4月、平安宮東部の立会調査でも、平安時代後期の遺物包含層が検出される(文4-37)。

6～7月、太政官跡でも近世以降の土壌を検出するにとどまった(文4-38)。主水司跡では、中・近世の遺構以外に江戸時代前期の落込み、土壌が検出され、桃山時代の土壌からは、土器、陶磁器、金箔瓦などが出土する(文4-39)。西院跡では、近世の土壌、平安時代の土壌が検出される(文4-40)。

7月、縫殿寮跡の立会調査が行われ、金箔瓦が採取される(文4-41)。大蔵省跡の立会調査では、時期不明の遺物包含層が検出される(文4-42)。7～8月、西院跡では、聚楽第に関連する桃山時代の井戸、土壌が検出され、金箔瓦やファイゴの羽口などが出土する。平安時代の土器も出土(文4-43)。

9月、漆室跡では、江戸時代中期の井戸、土壌が検出される(文4-44)。

昭和53年(1978)1月、大極殿跡も発掘調査されるが、近世から近代の土取り穴で攪乱されていた(文4-45)。1～2月、八省院跡の発掘調査では、近世後期以降の整地層の検出にとどまり(文4-46)、内裏跡では、平安時代初期の遺物包含層が検出された(文4-47)。

2月、左兵衛府跡では、平安時代初期、平安時代中期の溝が検出され多量の土器が出土した。

土師器杯の内面に和歌が墨書されたものがある。「主馬」と墨書された土師器も出土した(文4-48)。朝堂院康楽堂跡も発掘調査されるが、近世以降の土取り穴、土壌、溝、井戸などの検出にとどまった(文4-49)。

3月、平安宮の東・南限、南東部の立会調査が行われ、中世の遺物包含層、平安時代後期、室町時代、江戸時代の遺物包含層が検出された(文4-50)。3～5月、造酒司跡の発掘調査が行われ、造酒司の倉庫跡が検出される(文4-51)。

4月、御井跡では、近代の溝、池跡を検出するにとどまる(文4-52)。典薬寮跡でも平安時代の遺構は検出されていない(文4-53)。4～5月、中和院跡では、平安時代前期の落込み、平安時代中期の遺物包含層が検出され、多量の遺物が出土する(文4-54)。中務省跡でも、平安時代の土壌から多量の土器が出土した(文4-55)。

5～6月、陰陽寮跡では、平安時代の建物跡、溝、柵が検出され、瓦、土器などが出土した(文4-56)。朝堂院跡では、地山を検出するにとどまる(文4-57)。

6～8月、内裏跡で、平安時代の遺物包含層が検出される(文4-58)。

7月、豊楽院跡(文4-59)、太政官跡(文4-60)、朝堂院跡(文4-61)では、近世の遺構が検出される。7～8月、正親司跡では、平安宮西面築地外溝に対応する平安時代前期の溝が検出される。この溝は平安時代後期に改修される。正親司を南北に区画する溝も検出された(文4-62)。

8～9月、小安殿跡では、聚楽第の濠を思わせる大規模な濠状遺構が検出される(文4-63)。

9～11月、太政官跡の発掘調査が行われ、南北方向の平安時代前期の築地跡と両側溝、平安時代後期の瓦溜が検出される。古墳時代後期の溝も検出された(文4-64)。

昭和54年(1979)2～3月、主殿寮跡では、近世の土取り穴が検出される(文4-65)。

3月、図書寮跡では、平安時代前期の土壌から土師器、須恵器、瓦などが出土した(文4-66)。

4～5月、中務省跡では、発掘調査で建物基壇、柱穴、掘立柱建物、瓦溜などが検出される(文4-67)。4～8月に行われた宴松原、造酒司跡の立会調査では、瓦溜が検出される(文4-68)。

5月、大炊寮跡では、平安時代の遺物包含層が検出された(文4-69)。茶園跡では、近世の遺構しか検出されず(文4-70)。5～7月、豊楽院跡の立会調査で、豊楽院東回廊に係る凝灰岩の化粧石が原位置のまま検出される(文4-71)。

6～7月、御井跡の発掘調査で、平安時代後期から鎌倉時代の瓦敷遺構が検出される(文4-72)。宮内省跡、主水司跡の立会調査では、平安時代の遺物包含層が検出される(文4-73)。中和院跡では、近世の土取穴、柱跡が検出される。土取穴から瓦、土器が多量に出土した(文4-74)。

7月、豊楽院跡の発掘調査では、凝灰岩の破片を含む平安時代の整地層が検出された(文4-75)。

8月、太政官跡の発掘調査で、平安時代中期の土壌、溝が検出される(文4-76)。8～9月、大蔵省跡の発掘調査で、近世の土壌、溝などが検出される(文4-77)。8～翌年3月、朝堂院跡のガス工事に伴う立会調査で、朝堂院東廊の基壇縁、承光堂、明礼堂、暉章堂の北縁、太政官西築地、北築地などが検出される(文4-78)。

11月、内蔵寮跡の発掘調査で、土取穴から平安時代前期の軒平瓦が検出される(文4-79)。

12～翌年1月、朝堂院跡の発掘調査で、平安時代から中世の集石遺構、土壌、落込みなどが検出される(文4-80)。

昭和55年(1980)1月、平安時代の内裏内郭回廊の凝灰岩板石で造られた東側溝が検出される(文4-81)。朝堂院跡の発掘調査でも平安時代の遺物包含層が検出される(文4-82)。中務省跡では、発掘調査で平安時代前期の溝、土壌が検出され、平安時代前期末から中期の基壇を伴う建物が検出される。平安時代前期の溝は、中務省の北限を示す。古墳時代の土壌も検出される。「内舎人」と墨書する土器が出土する(文4-83)。

3～4月、朝堂院跡の発掘調査で、江戸時代の土壌から平安時代前期の瓦、土師器、近世の陶磁器などが出土した(文4-84)。

4月、中務省跡の発掘調査で、3期に分けられる平安時代前期から中期の遺構が検出され、中務省を区画する溝、掘立柱建物、土壌が見つかる。土器、陶磁器、軒瓦などが出土する(文4-85)。梨本院跡の発掘調査では、近世から現代の井戸、土壌が検出される。土器、陶磁器が出土する(文4-86)。4～5月、太政官跡の発掘調査では、近世後期から近・現代の井戸、土壌、溝、落込みが検出され、平安時代の瓦、土師器が出土する(文4-87)。4～7月、東雅院跡、大膳職跡の立会調査で、丸太町と猪熊通の交差点の北部で、弥生時代の遺物包含層が検出され、平安時代の落込みも検出される(文4-88)。

5月、朝堂院跡の発掘調査では、江戸時代の土壌から多量の平安時代の瓦が出土し、鴟尾片が出土する(文4-89)。

6月、縫殿寮跡の発掘調査では、江戸時代の井戸が検出され、江戸時代の陶磁器に混じって、平安時代中期の瓦、土器、陶器、桃山時代の金箔瓦が出土した(文4-90)。豊楽院跡の発掘調査で、近世以降の土壌、井戸が検出される(文4-91)。

7～8月、太政官跡の発掘調査で、平安時代の溝が検出される。土壌から平安時代前期の瓦が出土する。江戸時代の土取穴、井戸、溝も検出された(文4-92)。

9～10月、朝堂院跡の発掘調査で、江戸時代の土取穴から100点以上の軒瓦などが出土した(文4-93)。西雅院跡の発掘調査では、近世の土壌が多数検出される。土壌内から近世の遺物に混じって、平安時代の土器、陶磁器、瓦などが出土する(文4-94)。9～11月、豊楽院、治部省、右馬寮跡の立会調査では、西ノ京中学校の北東隅で、多量の平瓦片が出土する(文4-95)。

左京 昭和52年(1977)1～2月、左京九条二坊の発掘調査で、近世の井戸や土壌から古墳時代の須恵器、江戸時代の陶磁器などが出土する(文4-96)。

2～5月、左京五条一坊の発掘調査で平安時代の溝、土壌、井戸などが検出され、斎串・櫛などの木製品、古銭、土器、軒瓦などが出土する(文4-97)。

3月、左京八条三坊の発掘調査が行われ、八条坊門小路の北溝の一部、平安時代末の井戸が検出される(文4-98)。

昭和53年(1978)2～3月、左京七条三坊の発掘調査で、平安時代末期から鎌倉時代の整地層、建物、井戸、中世の土壌墓群が検出される(文4-99)。

8～翌年3月、左京八条三坊では、京都駅前の地下街建設にあたって発掘調査が行われ、八条坊門小路、室町小路が検出される。平安時代の井戸も検出された(文4-100)。8～9月、左京九条四坊で、平安時代後期の東洞院大路東側溝が検出され、中世の建物、井戸などが検出される(文4-101)。

9～翌年2月、左京八条三坊七町の発掘調査が行われ、平安時代から室町時代の遺構、遺物が検出され、平安時代の流路や、中世の墓跡、炉跡、井戸、土壌などが検出される(文4-102)。

10～12月、左京一条二坊では、桃山時代の多量の金箔瓦が出土した瓦溜、室町時代の濠の可能性のある溝、石室、埋甕などが検出される(文4-103)。

昭和54年(1979)3月、二条城内の北東隅の立会調査で、平安時代、鎌倉時代、室町時代の遺物包含層が検出され、土壌内から中世の大甕が出土した(文4-104)。

8～9月、左京四条三坊の発掘調査で、平安時代後期の四条坊門小路の北側溝、鎌倉時代、室町時代の土壌などが検出される。流れ堆積から弥生時代、古墳時代の土器が出土した(文4-105)。

11～12月、左京七条三坊の発掘調査で平安時代後期から室町時代の七条坊門小路の路面と北側溝が検出される(文4-106)。

12～翌年7月、法華寺院の一つ、本囀寺跡が発掘調査され、建物、井戸、柵、濠などが検出された。縦横に掘りめぐらされた室町時代後半の濠が見られた。(文4-107)。

昭和55年(1980)4～6月、左京三条三坊の試掘、立会調査で、室町時代の土壌から人骨、経筒、土師器が出土した。室町時代、江戸時代の遺物包含層、平安時代後期の土壌も検出される(文4-108)。

7月、左京三条三坊の立会調査で、平安時代後期、鎌倉時代、室町時代の遺物包含層が検出される(文4-108)。

8月、左京北辺三坊の試掘調査で、平安時代後期の土壌から、人骨、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器などが出土する(文4-108)。

9月、左京三条三坊の立会調査で、平安時代後期、古墳時代の土壌が検出される。鎌倉時代の井戸も検出される(文4-108)。同坊の試掘調査でも平安時代後期の土壌、遺物包含層が検出され、土師器皿、軒丸瓦、白磁などが出土する(文4-108)。

12月、平安京左京七条三坊の立会調査で、平安時代後期の遺物包含層、土壌、平安時代前期、鎌倉時代の土壌が検出される(文4-108)。

右京 昭和52年(1977)6月 西寺東僧房跡の発掘調査で、東僧房の礎石抜き穴、西辺の雨落溝を検出する。第10次調査(文4-109)。

7～8月、右京二条四坊十二町の発掘調査が行われ、平安時代の遺構は検出されなかったが、室町時代の暗渠が検出される(文4-110)。

11～翌年3月、右京七条一・二坊、西市跡の発掘調査が行われ、西市の一部が西大路七条の交差点で確認され、溝や井戸、土壌などが検出された。出土した遺物には200枚余の皇朝十二銭や、銅銭の数を記した木札、木印をはじめ、箸、しゃもじ、盤、皿などの木製品や、緑釉陶器、灰釉

陶器などの土器類がある(文4-111)。

昭和53年(1978)1月、西寺跡第12次調査が行われ、一辺240cmの木枠組の井戸が検出され、西限築地の凝灰岩暗渠も検出された(文4-112)。

5～6月、右京四条一坊(西宮領跡)の調査では、平安時代から中世の遺物が出土した池跡が検出され、須恵器片に「壹」と記された墨書土器が出土する(文4-113)。

8月、右京五条二坊(朱雀第七小学校)では、平安時代前期から中期の掘立柱建物が検出される。旧石器時代の有舌尖頭器が出土した(文4-114)。西寺跡の発掘調査が行われ、東僧坊の雨落ち溝、柱跡、瓦溜が検出される(文4-115)。

11～12月、右京三条二坊では、平安時代の遺物包含層、平安時代前期から中期の掘立柱建物、溝、井戸などが検出される(文4-116)。

昭和54年(1979)1月、西市跡の発掘調査が行われる。平安時代の井戸から銭貨、刀子、鋤先などの金属製品、曲物、櫛、斎串などの木製品、緑釉陶器、土師器、須恵器などの土器類がまとめて出土する(文4-117)。1～3月、右京九条二坊で、平安時代の掘立柱建物、柵、溝などが検出され、古墳時代の竪穴住居跡、溝なども検出された(文4-118)。

3月、西寺東回廊跡が検出される(文4-119)。3～4月、右京四条一坊(朱雀院)では、平安時代の遺物包含層、柱穴が検出される。土壌から弥生時代の磨製石斧が出土した(文4-120)。3～11月、右京六条一坊の調査で、朱雀大路の西側溝、平安時代後期の土壌、室町時代の井戸が検出される(文4-121)。

5～8月、右京三条三坊十町で、平安時代前期(9世紀前半)の掘立柱建物、柵、溝、土壌などが検出される。墓(10世紀前半)、湿地状遺構(9世紀後半)もある(文4-122)。

7～8月、右京北辺四坊では、江戸時代後期の南北方向の溝、土壌が検出される。平安時代後期の素掘りの井戸も検出される(文4-123)。

8～9月、右京北辺四坊六町、土御門大路跡の発掘調査で、平安時代前期の土御門大路北側溝が検出される(文4-124)。

昭和55年(1980)1～11月、下水道工事に伴う立会調査で、右京三条三坊・四坊では、平安時代の土壌、遺物包含層、古墳時代の遺物包含層、平安時代の恵止利小路西側溝などが検出される(文4-125)。

4～翌年6月、右京二条三坊・四坊の立会調査では、各所で、菖蒲小路、春日小路、大炊御門大路、中御門大路など、平安京の街路跡が検出される(文4-126)。4～6月、右京九条一坊、西寺跡の立会調査で、平安時代前期の遺物包含層が検出され、土器、陶磁器、軒瓦などが出土した。平安時代前期、中期の土壌も検出される(文4-108)。4～7月、右京三条三坊三町の発掘調査で、平安時代前期(9世紀後半)の掘立柱建物、柵、溝、井戸、湿地状遺構などが検出される(文4-127)。

5月、西寺跡第17次発掘調査が行われ、平安時代前期～中期の井戸が検出される。古墳時代の土師器、須恵器が出土する(文4-128)。右京二条二坊の立会調査で、縄文時代早期の押型文深鉢片

が出土する(文4-108)。

6～7月、西寺跡第18次発掘調査が行われ、平安時代の土壌、集石遺構が検出される。古墳時代の土師器、須恵器も出土する(文4-129)。

7月、右京八条一坊の試掘調査で、平安時代後期の土壌、室町時代の柱穴、井戸、江戸時代の土壌が検出される。七条大路に位置する路面も検出される。(文4-108)。

8月、西寺跡第19次発掘調査が行われ、西僧房の基壇が検出される。大量の軒瓦が出土する(文4-130)。

10月、右京一条三坊の立会調査で、鷹司小路南側溝と考えられる平安時代後期の東西溝が検出され、溝内から土師器、須恵器、瓦などが出土した(文4-108)。右京五条二坊の発掘調査で、平安時代前期から平安時代後期まで続く、西堀川小路が検出される。西堀川、西堀川小路東路面、東側溝、築地、宅地内側溝など、西堀川小路の東側が明らかになる。堀川小路が8丈であることが発掘調査で確定する。12丈説を否定し、平安京の条坊制を確定する重要な調査となる(文4-131)。

羅城門 昭和52年(1977)6～7月、羅城門跡の発掘調査が行われ、近世の遺物包含層が検出され、陶磁器が出土する(文4-132)。

京都市文化財保護課の調査

平安宮 昭和52年(1977)1～2月、西院跡が発掘調査され、長岡宮式の軒平瓦、平安時代の土器などが出土した(文4-133)。

2月、平安宮の東限を示す溝が検出され、平安時代後期の軒瓦が出土した(文4-134)。

3月、内蔵寮の発掘調査が行われ、近世の聚楽土を採取した土壌が検出され、桃山時代の金箔瓦が出土した(文4-135)。

5月、太政官跡の立会調査が行われ、平安時代の軒瓦が出土する(文4-136)。

昭和54年(1979)4月、内裏跡の立会調査で、土壌内から平安時代の緑釉陶器、土師器、黒色土器、瓦などが出土する(文4-137)。

9月、内蔵寮跡で落込みが検出される(文4-138)。

左京 昭和52年(1977)5月、左京四条一坊、後院町跡の試掘調査で、平安時代中期の軒瓦、近世初頭の土師器皿が出土する(文4-139)。

昭和54年(1979)5月、左京五条四坊の立会調査で、平安時代末期から室町時代までの遺物包含層が検出される。鎌倉時代の土壌も検出された(文4-140)。

6月、左京五条三坊の試掘調査で、鎌倉時代から室町時代の遺構が重複して検出される(文4-141)。

7月、左京三条四坊の試掘調査で、石垣が検出され、土師器、陶器などが出土した(文4-138)。左京三条三坊の試掘調査では、平安時代後期の井戸、溝、鎌倉時代の溝、室町時代の土壌などが検出される(文4-142)。左京五条四坊の試掘調査では、中世の遺物包含層が検出される。弥生土器も出土した(文4-143)。

8月、左京四条三坊の試掘調査で、鎌倉時代から室町時代の遺物包含層、土壌などが検出され

る(文4-144)。左京二条四坊の立会調査で、室町時代の土師器皿が詰まった土壌が検出される(文4-145)。

9月、左京七条四坊の立会調査で、土壌内から円礫、人骨、土師器皿、須恵器、鉄釘、炭、焼土などが出土し、墓跡と考えられた(文4-146)。左京七条三坊の立会調査でも、鎌倉時代の土壌墓が検出される(文4-147)。左京四条三坊の立会調査では、平安時代中期の土壌、平安時代末期から桃山時代までの遺物包含層が検出される(文4-148)。左京五条三坊の立会調査で、鎌倉時代、室町時代の遺物包含層が検出される(文4-149)。

10月、左京六条三坊の立会調査で、土壌内から中世の土器、陶磁器が出土した(文4-138)。左京五条二坊の立会調査で、弥生時代末期の流路が検出され、壺、甕、こしき、高杯など完形の土器がまとめて出土する(文4-150)。左京六条二坊の試掘調査で、鎌倉時代の土壌が検出され、土師器皿、瓦器碗、須恵器鉢、白磁四耳壺、青磁皿などが出土した(文4-151)。左京四条三坊の立会調査では、鎌倉時代～室町時代の遺物包含層が検出された(文4-152)。

11月、左京七条三坊の試掘調査で、平安時代後期から室町時代の七条大路北側溝が検出される(文4-153)。

12月、左京七条一坊の試掘調査で、平安時代から鎌倉時代の南北方向の溝が検出され、土師器、須恵器、緑釉陶器などが出土する。縄文時代、弥生時代から古墳時代の土器も出土した(文4-154)。

昭和55年(1980)2月、左京五条三坊の試掘調査で、平安時代後期、室町時代の柱穴、江戸時代の井戸などが検出される(文4-155)。

3月、左京八条三坊の立会調査で、土師器、瓦が(文4-138)、左京七条四坊の立会調査で、平安時代の土器、陶器が出土した(文4-138)。

右京 昭和54年(1979)9月、右京五条二坊の試掘調査で、平安時代中期の溝、平安時代後期から鎌倉時代の遺物包含層が検出される(文4-156)。

10月、右京六条四坊の立会調査で、弥生時代の遺物包含層、弥生時代中期の溝が検出される。線刻のある甕、完形品の水差形土器が出土する(文4-157)。10～12月、右京三条二坊の立会調査で、時期不明の柱穴列、溝が検出される(文4-158)。

12月、右京二条二坊の立会調査で、平安時代の遺物包含層、土壌、ピットが検出される(文4-159)。

昭和55年(1980)1月、右京八条二坊の立会調査で、平安時代中期の遺物包含層が検出される(文4-160)。

2月、右京一条三坊の試掘調査で、平安時代前期の南北方向の溝が検出される。弥生時代の土器が出土した(文4-161)。

3月、右京一条二坊の試掘調査で、平安時代中期の溝、土壌、柱穴などが検出され、溝内から多量の土器、銭貨、石帯などが出土した(文4-162)。

(財)古代学協会の調査

左京 昭和52年(1977)4～7月、平安京左京、高倉宮、曇華院跡の発掘調査が行われ、平安時代後期から鎌倉時代の高倉小路西側溝が検出される。曇華院に関連する建物跡、石組、石垣などが検出される(文4-163)。

7～9月、左京三条三坊、押小路殿跡の第2次発掘調査が行われ、平安時代末期、室町時代、桃山時代、江戸時代の井戸、平安時代末期から鎌倉時代の烏丸小路西側溝などが検出される(文4-164)。

昭和54年(1979)1～5月、左京一条三坊九町、平安京土御門烏丸内裏跡の発掘調査が行われ、江戸時代の水戸藩邸と関係する石垣と暗渠が検出される。平安時代後期から鎌倉時代の溝から輪宝が出土する。中世の土壌、井戸なども検出される。土御門大路の路面と側溝も検出される(文4-165)。

6～9月、左京五条三坊十五町の発掘調査が行われ、平安時代後期の井戸、鎌倉時代の墓跡、室町時代の土壌が検出される。埋設した常滑の大甕が検出される。近世の陶磁器が出土する(文4-166)。

11～翌年5月、左京八条三坊二町の発掘調査が行われ、平安時代前期から中期の自然流路から人面墨書土器、土馬などが出土する。平安時代末、鎌倉時代から室町時代の鑄造関連遺物も出土する。平安時代後期から室町時代前期の井戸、ピットなども検出された(文4-167)。

昭和55年(1980)7～10月、左京三条三坊、押小路殿跡の第3次発掘調査が行われ、平安時代の後期、鎌倉時代、室町時代後期、江戸時代初期の井戸が検出される。室町時代後期の遺物包含層、土壌、江戸時代初期の土壌、建物、江戸時代の瓦溜なども検出された(文4-168)。

11～翌年1月、左京三条三坊十一町の発掘調査が行われ、平安時代中期、鎌倉時代の烏丸小路西側溝が検出される。室町時代後期の井戸、土壌、江戸時代初期の井戸なども検出される(文4-169)。

京都府教育委員会の調査

左京 昭和53年(1978)2～12月、左京北辺三坊六町の発掘調査で、平安時代から江戸時代の遺構が検出される。桃山時代(17世紀前後)の土壌から、土師器皿や塩壺とともに、織部徳利、志野水注、唐津皿、信楽播鉢などが出土する。付札が出土しており、「慶長九年」の紀年銘がある。他の土壌からも桶の底板に「慶長拾年松や三郎右衛門」と記すものがある。京都糸割符仲間松屋三郎右衛門の邸宅跡か(文4-170)。

12～翌年3月、左京二条大路の発掘調査で、江戸時代の溝、柵、井戸、土壌などが検出される(文4-171)。

右京 昭和54年(1979)2～8月、右京一条三坊九町で、平安時代前期の建物6棟が検出され、東西棟の主殿を中心に脇殿が左右対称に並ぶ建築群が検出される(文4-172)。平安時代前期の建物が群として確認された初例で、平安京の住居形態を知る重要な資料となった。

5～7月、右京二条二坊五町の発掘調査で、平安時代の建物、柵、方形土壌が検出され、中期の方形土壌から灰釉陶器、緑釉陶器、須恵器、土師器など多量の土器が出土する(文4-173)。

教王護国寺の調査

左京(東寺) 昭和52年(1977)12～昭和55年(1980)3月、東寺の東側部分を中心に8箇所、発掘調査が行われ、発掘調査の成果をもとに伽藍中心線が決定され、西寺と平行関係にあるとされた(文4-174)。

2 調査の成果 重層する平安京跡

平安京以前 平安京跡にも旧石器時代から縄文時代早期にまで遡る遺跡があることが証明された。右京五条二坊(朱雀第七小学校)で、旧石器時代の有舌尖頭器が出土し(文4-114)、右京二条二坊の立会調査では、縄文時代早期の押型文深鉢片が出土した(文4-108)。

また、弥生時代の遺跡が、立会調査や試掘調査によって、広範に平安京跡に立地していることが明らかになった。左京五条四坊の試掘調査では、弥生土器が出土し(文4-143)、左京五条二坊の立会調査でも、弥生時代末期の流路から壺、甕、こしき、高杯など完形の土器が出土した(文4-150)。さらに左京七条一坊の試掘調査でも、縄文時代、弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土する(文4-154)。右京六条四坊の立会調査では、弥生時代中期の溝が検出され、線刻のある甕、完形品の水差形土器が出土した(文4-157)。烏丸通下でも、弥生時代末期の竪穴住居跡が検出される(文4-34)。

平安時代の遺跡

街路の検出 平安京の条坊復原の根拠となる街路の検出が相次いだ。烏丸線内の遺跡調査で、平安京跡を南北に縦断して発掘が行われたことによって、東西街路跡が数多く検出された。楊梅小路の路面と側溝、六条坊門小路の路面と南側溝、樋口小路、三条大路の路面と北側溝、六角小路の路面と北側溝、北小路路面と側溝、七条坊門小路の路面と両側溝、塩小路の路面と両側溝、左女牛小路などである。

(財)京都市埋蔵文化財研究所の調査でも、左京で八条坊門小路、室町小路、東洞院大路東側溝、四条坊門小路の北側溝などの街路跡検出がある。右京でも西靱負小路、朱雀大路の西側溝、七条坊門小路の路面と北側溝、恵止利小路西側溝、鷹司小路南側溝が検出され、右京二条三坊・四坊の立会調査でも、菖蒲小路、春日小路、大炊御門大路、中御門大路などが検出される(文4-126)。これらの街路遺構は、2500分の1の地図上に条坊復原する定点となった。

相次ぐ平安宮の遺構・遺物 調査件数の拡大に応じた調査は、遺構、遺物発見の確率をあげ、平安宮跡の遺構、遺物検出につながる成果を生み出した。左兵衛府跡では、内面に和歌が墨書された土師器杯、「主馬」と墨書された土師器片が出土しており(文4-48)、中務省跡では、平安時代前期末から中期の基壇を伴う建物なども検出され、平安時代前期の溝は、中務省の北限を示した。「内舎人」と墨書する土器も出土した(文4-83)。

造酒司跡の倉庫跡も検出され(文4-51)、ガス工事に伴う立会調査では、朝堂院東廊の基壇縁、承光堂、明礼堂、暉章堂の北縁、太政官西築地、北築地の痕跡などが検出された(文4-78)。内裏内郭回廊の凝灰岩の板石で造られた東側溝も検出された(文4-81)。

平安時代前期の建物 右京一条三坊九町で、東西棟の主殿を中心に脇殿が左右対称に並ぶ平安時代前期の6棟の建物群が検出された。建物配置がわかる調査結果は特筆される(文4-172)。

市の発掘 平安京の市の解明につながり、市の状況がわかる資料が得られている。西市跡の発掘調査で、平安時代の井戸から銭貨、刀子、鋤先などの金属製品、曲物、櫛、斎串などの木製品、緑釉陶器、土師器、須恵器などの土器類がまとめて出土した(文4-117)。

中・近世の遺跡

墓跡群の検出 東本願寺前一带が中世の墓跡群であることが明らかになる。東本願寺前の3箇所のトレンチによる発掘調査で、中世の墓跡群が検出された(文4-21～23)。

旧二条城の検出 近世城郭の先駆けである旧二条城の存在が、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会の調査で明確になる。足利義明を奉じ、入洛した織田信長が築城した旧二条城の濠と石垣が、4箇所で検出され、宣教師ルイス・フロイスが『日本史』に記したとうり、石仏などを多用した石垣が検出された。

近世考古学の木簡 桃山時代(17世紀前後)の土壌から、土師器皿や塩壺とともに、織部徳利、志野水注、唐津皿、信楽播鉢などが左京北辺三坊六町から出土した。付札が出土しており、「慶長九年」の紀年銘がある。他の土壌からも桶の底板に「慶長拾年松や三郎右衛門」と記すものがあり、紀年銘のある木簡の出土は、近世考古学の今後に大きな期待が持てることを示した(文4-170)。

3 平安京跡の調査体制 調査組織の充実化

(財)京都市埋蔵文化財研究所設立時の状況 平安京調査会、六勝寺研究会、鳥羽離宮跡調査研究所が母体となって、昭和51年(1976)11月、(財)京都市埋蔵文化財研究所が設立され、京都市内の遺跡調査の組織化がはかられた(文4-175)。京都市高速鉄道烏丸線遺跡調査会は、3年目を迎え、市街地の道路上を発掘調査する試みが軌道にのり、本格的にトレンチによる発掘調査が実施されていた。最も忙しい時期であった。(財)古代学協会は文部省の認可団体であり、独自の活動が可能であり、継続して平安京跡の調査が行われていた。

昭和51年(1976)11月以降、新たな展開を迎えるようになる。(財)京都市埋蔵文化財研究所が、平安京跡調査の中核としての役割を果たすことになる。(財)京都市埋蔵文化財研究所発足以後は、臨時に大学関係や寺院によって任意の団体が生まれ、実施されることはあったが、継続して平安京跡の発掘を実施したのは、(財)京都市埋蔵文化財研究所、京都市高速鉄道烏丸線遺跡調査会、(財)古代学協会、京都府教育委員会文化財保護課、京都市文化観光局文化財保護課の5者であった。

埋蔵文化財保護体制の充実化

京都市の動き 昭和53年(1978)3月、田中琢氏は「京都市の遺跡保護体制は、財団の設立など優れた点もあるが、文化財保護条例を欠き、埋蔵文化財施設が不十分など、遅れた側面も持ち合わせている」と指摘する(文4-176)。それを受け、同3月、京都市埋蔵文化財調査センター等の施

設整備費予算が市議会で議決され、京都市考古資料館の建設が決定した(文4-177)。

昭和54年(1979)3月、田辺昭三氏は昭和51年度の開発スピードでいけば、わずか52年で、平安京跡は完全に消滅するという計算がなりたち、遺跡破壊の状況を放置すれば、未来永劫悔いを残すと報告する(文4-178)。平安京跡が深刻な破壊の状況下にあることを物語っていた。4月、京都市考古資料館の展示企画、設計施行、列品展示を研究所に委託される。11月、京都市考古資料館は開館し、同時に(財)京都市埋蔵文化財研究所も現在地に移転した(文4-177)。

昭和55年(1980)2月、第27回京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会考古学専門委員会で、発掘調査が終了したことから、遺物の保管、地下鉄南進工事に伴う調査体制について協議された(文4-179)。4月、京都市文化観光局に京都市埋蔵文化財調査センターが新設され、主に行政指導にあたる(文4-180)。10月、遺跡地図が改訂される(文4-181)。11月、埋蔵文化財関係の業務は、(1)調査・研究、(2)保護行政、(3)文化財保護思想の普及啓発とされ、(1)は(財)京都市埋蔵文化財研究所が、(2)は京都市埋蔵文化財調査センター、京都市文化財保護課が、(3)は京都市考古資料館が行い、3者は有機的に結合すべきであると主張される(文4-182)。

この時期は、京都市埋蔵文化財調査センターが設立され、行政指導にもとづくいわゆる原因者負担の発掘調査がルール化され、(財)京都市埋蔵文化財研究所が広範に発掘調査を実施し、京都市考古資料館が開館することによって、不十分ながらも遺跡破壊に対応し、平安京跡の普及啓発活動に道筋が立てられた時期であった。

立会・試掘調査の充実

国庫補助事業による立会・試掘調査 少しでも、遺跡破壊に対処しようと京都市文化観光資源調査会埋蔵文化財部会の指摘により、昭和48年(1973)以降、国庫補助事業で、立会・試掘調査が行われていた。昭和54年(1979)4月からは、京都市文化財保護課が行っていたこの立会・試掘調査に(財)京都市埋蔵文化財研究所の職員が加わる。翌年からは、(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託された。

昭和54年度文化庁国庫補助事業による京都市内の試掘・立会調査は、試掘調査が77件、立会調査が596件であった。そのうち385件が平安京跡である。埋蔵文化財包蔵面積は、市内の開発可能地の30%近くに達し、年間2,000件以上の大小の土木工事の届出が出されていた(文4-183)。

行政指導と(財)京都市埋蔵文化財研究所が連動することによって、より正確な情報が得られるようになり、立会・試掘調査だけに終わらず、結果的に発掘調査の対象が増え、発掘調査件数の増大をもたらした。昭和54年(1979)以後、定期的に概報が刊行されるようになり、立会・試掘調査は、市街地に立地する平安京跡の分布調査の役割も果たした。国庫補助事業による立会・試掘調査は、開発による一方的な遺跡破壊を防ぐ防波堤としての役割を担った。

下水道工事に伴う原因者負担による平安京跡の立会調査も(財)京都市埋蔵文化財研究所が、盛んに行っていた。

記録の充実と設備の充実

調査記録の改善 調査組織の統一化ははかられたが、一方でまちまちであった平安京跡調査の

記録方法を改善する必要があった。平安京跡の調査では、精度の高い記録が肝要であるが、それまでは任意の記録しかなく、統一された精度の高い記録が欠けていた。平安京跡調査の記録には、国土直角座標系に発掘調査地点が結びつく記録方式が望まれ(文4-184)、昭和53年(1978)、平安京跡調査の測量基準点の設置が全国にさきがけて行われた(文4-185)。

(財)京都市埋蔵文化財研究所の機材・施設の充実 遺跡、遺物撮影の増加に対処し、研究所内の埋蔵文化財調査の効率化をはかるために、昭和52年(1977)、写真撮影にストロボ器材の導入、昭和53年(1978)、保存処理施設を下鳥羽に開設し、木器処理のためのPEG含浸槽の設置などが行われた(文4-186)。

4 普及啓発活動の開始 市民への普及啓発

文化財講演会 昭和52年(1977)11月、(財)京都市埋蔵文化財研究所は、1周年記念事業として、文化財講演会を開催し、埋蔵文化財保護の普及啓発事業を行う。「埋蔵文化財の現状と課題」坪井清足、「京都における発掘調査の近況」田辺昭三、が演題であった(文4-187)。これ以後毎年、京都市と(財)京都市埋蔵文化財研究所が共催して、文化財講演会が実施されることになる。昭和53年(1978)11月には、この文化財講演会の2回目として、『シンポジウム平安京 - 平安京調査と現状を語り展望をひらく会 - 』が開催され、挨拶で理事長の村田治郎氏は、「まだ研究所としての成果はあがっておらず、これからの心の準備、期待を示す意味でのシンポジウムである」と説明する(文4-188)。平安京跡調査に研究者、市民ともども期待がこめられていた。

現地説明会 昭和53年(1978)5月、平安宮造酒司の倉庫跡が検出され、現地説明会が行われる(文4-189)。昭和54年(1979)3月にも西寺跡の現地説明会が開催された(文4-119)。

京都市考古資料館の開館 昭和52年(1977)11月、(財)京都市埋蔵文化財研究所は、1周年記念事業として、『京都市埋蔵文化財展』を開催するが、この展示は出品点数も限られ、臨時応急的なものであった(文4-190)。

昭和54年(1979)11月になって、京都市考古資料館が開館する。京都市内の出土遺物、とくに平安京跡から出土した遺物が常設展示されるようになり、日常的に見学でき、普及啓発活動の拠点ともなった(文4-177)。昭和55年(1980)8月、第1回小・中学校夏期教室が京都市考古資料館を利用して行われ、それ以後毎年開催される(文4-191)。

埋蔵文化財の保存

史跡指定 昭和52年(1977)3月、史跡栗栖野瓦窯跡に散乱している瓦を採取整理し、遺跡を緊急に応急整備することが行われる(文4-192)。昭和54年(1979)には、西寺跡に次いで、平安宮内裏内郭回廊が史跡指定された(文4-193)。都市再開発に付随して遺跡破壊が進行する状況では、平安京跡の重要遺構を保護の対象とし、史跡に指定することは当時としては緊急の課題であった。

旧二条城の石垣移築 昭和52年(1977)に地下鉄烏丸線の発掘調査で出土した旧二条城の石垣が現二条城に移築され、昭和55年(1980)5月、引き続き地下鉄烏丸線で出土した旧二条城の石垣が京都御苑内に移築される。昭和56年(1981)2～3月、地下鉄烏丸線内の旧二条城で出土した石仏

などが、洛西ニュータウン内の竹林公園に移設され、市民が見学できるようになる(文4-179)。

平安京右京一条三坊九町の建物跡保存 昭和55年(1980)3月、平安京右京一条三坊九町で検出された貴族の邸宅跡の保存に関して、府立山城高校改築計画の設計変更が了解され、とりあえず現状保存されることになり、主要建物の範囲の利用計画の策定が協議される(文4-172)。

5 調査研究活動の始動 歴史考古学の胎動

発掘の拡大と研究活動 昭和47年(1972)、京都市遺跡地図が刊行され、平安京跡全域が埋蔵文化財包蔵地として登録され、行政指導の対象となると、平安京跡の発掘調査は、飛躍的に拡大する。それに伴って出土遺物も増大した。市街地開発に対応する発掘調査であるため、開発の増大は発掘調査の拡大と繰り返しが求められ、遺物整理や研究を地道に行うことは困難であった。

昭和51年(1976)11月、(財)京都市埋蔵文化財研究所が設立されると、発掘調査で出土した遺物の整理、研究が求められる時代が到来することになった。平安京跡出土の瓦については、明治時代以後すぐれた研究の積み重ねがあり、西寺跡については杉山信三氏の伽藍配置の復原がなされ、先駆的な業績がなされていたが、瓦の研究を除いて、その他の遺構、遺物の研究はほとんど行われていない状況であった。発掘調査の拡大は、平安京跡の重層する遺跡状況が歴史都市としての認識を高め、調査成果の整理、研究の必要性を増大させることになったが、一方で、調査成果の整理、研究が遅滞せざるを得ない状況であった。(財)京都市埋蔵文化財研究所の発掘では、昭和51年(1976)11月、発足以来、昭和55年(1980)まで開発にともなって、大規模発掘が多数行われているが、整理、研究を進めることができず、未報告の発掘が多く残されている。

昭和54年(1979)3月、京都府教育委員会教育長金子欣哉氏は、「最近の発掘調査が、年を追うごとに大規模化・複雑化の方向へと歩を進めていることは、今さら言うまでもありません。そこで、これに伴って、調査の結果を整理し、報告することも容易な作業ではなくなってまいりました。」と述べられ、開発に伴う発掘調査による整理、報告が困難な状況であることが、率直に語られている(文4-194)。

特集号『佛教藝術』115号の刊行 昭和52年(1977)10月、京都市内の遺跡について特集号『佛教藝術』115号が刊行され、平安京跡調査の動向がまとめられた。平安宮跡のこれまでの成果を近藤喬一氏がまとめられ、平安宮跡は後世の攪乱土壌によって破壊されていることも多いが、部分的に良好に残る遺構があり、平安宮を復原する定点になることが述べられた(文4-195)。平安宮跡の研究は、点のような遺構を集め、集積することが、宮研究にとって課題であることをあらためて認識させられた。

杉山信三氏の「平安京・西寺跡」は、長年にわたる西寺跡の発掘成果がまとめられ、西寺の伽藍配置から平安京の条坊復原にせまる労作である。遺構をもとに体系的に整理され、遺構から復原する平安京跡研究の第一歩が踏み出されたと言えよう(文4-196)。

拙稿の「平安京・烏丸通」は、平安京跡の街路跡を取り上げ、楊梅小路、樋口小路などの街路の遺構実態を明らかにした。重層する路面や切り合う側溝の状況は、平安京の街路実態を示すも

のであった(文4-197)。

歴史考古学の開始

近世考古学の芽生え 昭和52年(1977)、酒井将氏によって「泥面子について - その若干の考察 - 」が発表され、江戸時代の泥面子の用途についての論究があり、児童の遊戯具であることを文献資料から論証される(文4-198)。昭和54年(1979)、渡辺誠氏は、近世陶器である焼塩壺の分類を行っている(文4-165)。近世の遺物を取り上げられ、江戸時代の考古学的研究の先駆的研究となったが、継続して近世考古学の一分野として続くことはなかった。

土器編年の試み 昭和53年(1978)、鈴木重治氏、松藤和人氏によって、『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』が刊行され、京都の土器編年が初めて発表される。この土器編年案は、同志社大学構内出土のものが中心で、平安京跡出土のものではなかった。

昭和55年(1980)、伊野近富氏等は京都の土器編年案を発表する(文4-170)。また、清水芳裕氏等も土器編年案を発表している。土器資料の増加は土器編年の気運を盛り上げた。土器編年が希求されてはいたが、資料数も少なく、まだ目安程度で確立されたものではなかった。

瓦研究 昭和52年(1977)3月、平安京跡ではないが、六勝寺跡の土壌から出土した平安時代後期の瓦が整理され報告される。木村捷三郎氏は、平安時代後期の軒先瓦を瓦の制作手法から分類され、軒平瓦を「折曲」、「半折曲式」、「包込式」に分類される(文4-199)。この分類は平安京跡出土の平安時代後期瓦にも適用され、以後平安時代後期瓦の分類用語として定着する。

都城の占地 昭和54年(1979)3月、八賀晋氏は、古代都城の占地を等高線の現地地形から読み取り、地形環境から都城の占地のあり方を分析され、平安京は東堀川、西堀川とも水量の確保と運河造成の容易さを考慮して、谷地形を基本としていると結論づける(文4-200)。

学会と研究会の発足

木簡学会の発足 木簡学会が発足し、昭和54年(1979)11月、『木簡研究』創刊号が発刊される。「創刊の辞」で岸俊男氏は「とりわけ文献史料の上で限界にきていた日本の古代史研究を甦らせ、未来に向かって無限の可能性を示すに至ったことは、木簡出現の意義として特質されねばならない。」と述べている(文4-201)。木簡学会の発足は平安京跡研究にとっても、将来を展望するうえで画期的なことであった。早速、創刊号で、百瀬正恒氏は、平安京西市跡の「承和五千文安継」、「承和六貫文」の付札を、丸川義広氏は、平安京左京八条三坊出土の西洞院川から出土した近世木簡2点を発表している。この木簡には「早瀬喜衛門尉」「越前北庄」と人名や地名が記されている。

日本貿易陶磁研究会の発足 昭和54年(1979)10月、三上次男氏を代表として「日本貿易陶磁研究会」が発足する(文4-202)。全国的に出土貿易陶磁の量が増え、貿易陶磁をめぐる全国組織が渴望されていた。昭和55年(1980)9月、第1回日本貿易陶磁研究会が京都で開催される(文4-203)。京都出土の輸入陶磁器についての研究発表がなされている。歴史考古学の研究分野が全国的に広がる契機となった。

京都市内の研究会 昭和54年(1979)8月、京都市内の調査団体の有志が集まり、岡崎・東山会

館で、研究発表会が行われる。平安京跡では、平安宮造酒司跡、東寺跡、西寺跡、西市跡の調査事例が発表された。事例発表の後には、緑釉陶器をめぐって討論会が行われている(文4-204)。研究をめざす情報交換と研究への積極的な姿勢がみられた。

埋蔵文化財担当者交流会の開催 昭和52年(1977)1月、古代史解明に重要な役割を果たす諸資料に関する情報交換と親睦をはかろうとする第1回埋蔵文化財担当者交流会が開催される。畿内と九州の資料比較を行うことが当面の目的であった(文4-205)。後に(財)京都市埋蔵文化財研究所で、平安時代の土器、陶磁器についての研究会が開催される。

この研究会は埋蔵文化財担当者の増加にともなって、年を追うごとに広がり、全国の埋蔵文化財担当者が集まる研究会となる。

刊行物の発刊

『平安京発掘資料選』の発刊 昭和55年(1980)10月、『平安京発掘資料選』が発刊される。編集にあたって、(財)京都市埋蔵文化財研究所の組織の未熟さと不十分な研究水準もあって、正規の報告書を刊行できないので、それにさきがけて発刊したとされた(文4-206)。

2万箱の出土遺物から選別され掲載された遺物は、平安京跡を代表する遺物であり、資料的価値が高く、平安京跡研究の基礎資料となり、平安京跡研究の指標となった。

報告書の刊行 昭和52年(1977)3月、(財)古代学協会から『平安京六角堂の発掘調査 平安京跡研究調査報告』第2輯が刊行される(文4-207)。

昭和55年(1980)3月、地下鉄烏丸線の昭和49・50年度(1974・1975)の調査報告書『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』が発刊される(文4-208)。

『平安京古瓦図録』平安博物館編の発刊 昭和52年(1977)7月、平安京跡出土の軒瓦が集成され、軒瓦の編年試案が作成され、造瓦技法の変遷、文字瓦の性格とその意義、官窯の変遷とその解体過程が論述される(文4-209)。戦前から集積され、研究されてきた平安京古瓦の集大成と言えよう。

平安京跡研究の現状

調査研究の模索 昭和53年(1978)8月、井上満郎氏は『研究史平安京』を発刊する。「展望 - むすびにかえて - 」のなかで、「いまのところ考古学による平安京の研究は発見あるいは調査に終わっており、研究の段階にまで進んでいないように思える。」と述べている(文4-210)。この指摘は考古学にもとづく平安京研究の現状を適格に反映していたと言えるだろう。

昭和51年(1976)から昭和56年(1981)までの平安京跡の研究活動は、研究会の開催や報告書の刊行などが行われる。とくに江戸時代以来進められてきた平安京跡出土の古瓦を集成して、優れた瓦研究を発表された『平安京古瓦図録』のような研究のレベルに達した領域もあったが、全体的にはまだ模索の状況が続いており、井上満郎氏が述べたように研究の現状は、基本的にはまだ発掘調査と資料集積の時代であった。

まとめ

第1段階は、寛政2年(1790)から昭和20年(1945)までとした。遅れて出発した近代考古学の流れが大正、昭和初期に平安京跡におよび、出土古瓦の紹介が始まり、平安京淳和院跡の発掘調査も行われるが、個別研究の色彩が強く、全体的には遷都1100年記念の大極殿碑建立からつづく史蹟顕彰の潮流が主流の時期であった。それも太平洋戦争で挫折する。

第2段階は、昭和21年(1946)から昭和45年(1970)である。戦後、文化財保護法が成立し、平安京跡の調査研究も再出発するが、昭和35年(1960)以後、都市開発が本格的に平安京跡に及び始め、行政の対応は始まるが、遺跡破壊が進む。立会調査や発掘調査は個人や、(財)古代学協会が受け皿であった。しかし、開発のスピードに追いつけず、平安京跡は遺跡破壊の危機に直面する。平安京跡をどうするのか、どう調査するのか、試行錯誤の時期であった。古瓦については、戦前からの蓄積もあり継承されていた。

第3段階は、昭和46年(1971)から昭和51年(1976)である。京都市が行政指導する発掘が始まる時期である。任意団体や大学関係、行政機関、(財)古代学協会が発掘を行い、開発が起因する原因者負担による緊急発掘の時期であった。発掘という視点で、平安京跡調査の最大の画期を求めるとすれば、昭和46年(1971)4月、京都市文化財保護課に埋蔵文化財技師が着任して(文3-144)、遺跡地図が刊行されたこの時期である。平安京跡全域が発掘調査対象となり、発掘調査が飛躍的に拡大した。調査法が模索され、平安京跡が具体的に見え始めた時期であった。

第4段階は、昭和52年(1977)から昭和55年(1980)までである。(財)京都市埋蔵文化財研究所が設立され、原因者負担で行う平安京跡調査の組織的対応が始まる時期である。調査体制が整備され、発掘件数も増大したが、平安京跡の整理・研究は、開発のスピードには追いつけず、報告や研究は遅滞する傾向にあった。発掘そのものも緊急発掘の連続で、応急処置の調査という性格もあった。

そうした中で、量的、面的に調査が広がり、平安京跡が旧石器時代から現代まで、連続的に複合する遺跡であることがわかり始めた。立会、試掘調査は、市街地に立地する平安京跡全体を分布調査して、大筋で遺跡の様相がわかる結果を生み出した。平安京の街路跡や平安宮の諸官衙跡、京内の邸宅跡、中世墓跡、旧二条城跡など、平安京跡の実態に迫る遺跡発見が相次ぐ時期である。平安京跡出土の古瓦については、江戸時代以来の伝統と資料の蓄積、継承された研究があり、ようやくこの時期に体系的にまとめられる(文4-209)。

おわりに

「平安京跡発掘史(1)」をまとめようと思った契機は、5年程前に研究所の仲間と「月曜研究会」と称し、「平安京跡発掘略史」を簡単にまとめ、若干思いを発表したときである。そのおり、「月曜研究会」のメンバーが「研究所が発足した前後の発掘の内容や実情がよくわからない。」と述べられ、発掘調査を当時担当したものとして責任を痛感した。また「それをまとめるのは私が適任だ。」という声も寄せられ、それ以来、公表されたデータを集めることに専念した。それを集成し、昭和55年(1980)までをまとめたのが本稿である。

蓄積したデータをもとに、できるだけ文献を選び出し、本文内容と繋がるようにして、検索の機能を持たせるようにした。平安京跡の発掘調査は市街地であることから、調査面積が狭く調査件数は、余りにも多い。せめて本文から検索して、各概要報告を簡単に選び出し、調査内容をスムーズに把握できるよう心がけた。本来、原典にあたってそれを記すべきであるが、時間的制約もあり、原典にあたれなかったものも多い。とくに、昭和以前の文献や行政文書は、孫引きになってしまった。稿を改めるおりに、完全なものにしたいと思う。

本稿をまとめるにあたって、所々の方々に御世話になった。とくに「月曜研究会」の方々、研究所のメンバー、京都市埋蔵文化財調査センターの方々にも多数御世話になった。姓名をあげ、御礼を述べるべきところであるが、紙面の都合もあり、不本意ながら、省略させていただいた。この末尾の礼でご容赦願いたいと思う。

平安京跡発掘略年表 - 1

年代	調査研究	行政	普及啓発
寛政2年 (1790)	裏松固禪『大内裏図考証』全50冊をまとめる。		
寛政8年 (1796)	藤貞幹『好古目録』で文字瓦は碑文と並んで重要と述べる(文1-2)。		
明治元年 (1868)		排仏毀釈の嵐が、宗教関連文化財の破壊、流出を招く(文1-24)。	
明治4年 (1871)		5月、宝物の亡失防止を目的に「古器旧物保存方」を命ず太政官布告発布(文1-25)。	
明治10年 (1877)	9～10月、E.S.モースにより、東京都大森貝塚が発掘される。		
明治21年 (1888)		宮内省に臨時の全国宝物取調局が設置される(文1-25)。	
明治28年 (1895)	10月、地図を使用した平安京条坊復原が行われる(文1-3)。		10月、遷都1100年を記念して大極殿碑が建立される(文1-26)。
明治29年 (1896)			12月、西洋の考古学に触発され『考古学会雑誌』第1号発刊(文1-4)。
明治30年 (1897)	5月、奥村探古、採集された「文字瓦」について意見を述べる(文1-5)。	「古社寺保存法」が制定される(文1-25)。	
明治32年 (1899)		3月、「遺失物法」が制定される(文1-25)。	
明治34年 (1901)	11月、関野貞、藤貞幹の『古瓦譜』は銘字の平瓦類に過ぎず、古瓦文様研究の必要を説く(文1-6)。		
明治36年 (1903)	2月、河村松太郎、平安宮跡採集の「栗」銘の軒瓦を含む8点を紹介する(文1-7)。		
明治41年 (1908)	1月、岩井武俊、平安時代の緑釉瓦に布目があることを紹介(文1-8)。		
明治44年 (1911)		3月、「史蹟及天然記念物保存ニ関スル建議案」が貴族院に提出される(文1-24)。	
大正4年 (1915)	8月、高橋健自、藤貞幹『古瓦譜』には贋作が多いことを指摘する(文1-12)。		
大正5年 (1916)		9月、日本で初めて考古学講座が京都帝国大学に設けられる(文1-13)。	
大正6年 (1917)		7月、京都府史蹟勝地調査会が設立される(文1-25)。	
大正8年 (1919)		4月、「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定される(文1-24)。	
大正9年 (1920)	6月、梅原末治、西寺跡の現状報告と採集瓦の紹介を行う(文1-14)。		
	6月、梅原末治、修学院村の高野で採取された「小乃」銘の瓦を紹介する(文1-15)。		

平安京跡発掘略年表 - 2

年代	調査研究	行政	普及啓発
大正10年 (1921)		3月、「史蹟名勝天然記念物保存法」が施行され、西寺跡を史蹟に指定(文1-28)。	
大正11年 (1922)	5月、梅原未治、修学院村の瓦窯跡の採取瓦が平安宮跡採取のものと同じであることを紹介(文1-17)。		
昭和2年 (1927)	4月、西田直二郎、淳和院跡のトレンチによる発掘を行う(文1-19)。		この頃、京都市教育会、遺址の標石を建てる(文1-27)。
昭和3年 (1928)	2～3月、丸太町通拡張に伴って豊楽院の基壇が検出される(文1-20)。		
昭和4年 (1929)		「国宝保存法」が制定、施行される(文1-25)。	
昭和5年 (1930)	10月、川勝政太郎、平安京跡の瓦を紹介(文1-10)。		
	10月、木村捷三郎、幡枝で発見された窯跡が延喜式記載の栗栖野瓦屋であることを主張(文1-21)。		
昭和6年 (1931)	11月、梅原未治、栗栖野瓦屋を発掘する(文1-22)。		
昭和8年 (1933)	9月、安田茂登治、釈迦谷の山林から平安中期の軒瓦を採取し紹介する(文1-11)。	第1回明治天皇聖蹟の史蹟指定が行われる(文1-24)。	
昭和9年 (1934)	足立康、藤原宮跡の大極殿跡を発掘する(文1-29)。		
昭和14年 (1939)	3月、木村捷三郎、緑釉瓦の研究発表をする(文1-30)。		
昭和22年 (1947)	静岡県登呂遺跡を発掘(文2-1)。		
昭和23年 (1948)		京都府教育委員会が発足する(文2-53)。	4月、「日本考古学協会」が結成される(文2-58)。
昭和24年 (1949)	8月、宇佐晋一、平安中期瓦の重量による研究を発表(文2-2)。		
	9月、宇佐晋一、遺跡調査が再開され、旧二条城の石垣を検出(文2-3)。		
昭和25年 (1950)		5月、「文化財保護法」が制定、公布される(文2-53)。	
昭和26年 (1951)		10月、(財)古代学協会が設立される(文2-60)。	
昭和27年 (1952)		4月、奈良国立文化財研究所が発足(文2-59)。	1月、(財)古代学協会、『古代学』を創刊(文2-61)。
昭和29年 (1954)		文化財保護法の一部が改正され、埋蔵文化財の届出制が採用される(文2-53)。	
昭和30年 (1955)	2～3月、京都府長岡宮朝堂院の門を発掘(文2-1)。		
昭和32年 (1957)	11～12月、勸学院跡が発掘調査される(文2-12)。		

平安京跡発掘略年表 - 3

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和33年 (1958)		原因者負担で名神高速道路建設のため大宅廃寺が調査される(文2-53)。	
昭和34年 (1959)	9～翌年1月、内野児童公園で大極殿跡が発掘調査される(文2-5)。		
昭和35年 (1960)	6月、杉山信三、西寺の発掘調査を手がけ、東僧坊跡を検出(文2-21)。		
	8～9月、(財)古代学協会、羅城門跡を発掘(文2-16)。		
昭和36年 (1961)	7月、坂東善平、緑釉陶器・瓦・青磁・白磁・土師器・須恵器など出土遺物を紹介(文2-24)。	4月、京都府教育庁文化財保護課に埋蔵文化財技師が着任(文2-53)。	
	11月、東寺創建当初の講堂基壇検出を紹介する(文2-20)。		
昭和37年 (1962)	2～3月、杉山信三、西寺の食堂跡を発掘する。第2次調査(文2-22)。	3月、京都府教育委員会から『京都府遺跡目録1961』が発刊される(文2-53)。	
	11～12月、杉山信三、西寺第3次発掘調査を行い、食堂院・八脚門・回廊・金堂・南大門を検出(文2-21)。	4月、平城京を守る会が結成される(文2-62)。	
		6月、関西文化財保存協議会が結成される(文2-62)。	
昭和38年 (1963)	9～翌年3月、大石良材、内裏跡で緊急立会調査を始め、凝灰岩で化粧した基壇の一部を検出(文2-8)。	阪急電鉄大宮～河原町間が開通するが埋蔵文化財調査は行われず(文2-53)。	
		10月、京都府教育委員会から埋蔵文化財の包蔵地として、平安京宮殿遺跡が公告される(文2-54)。	
昭和39年 (1964)	2月、杉山信三、平安京の造営尺を割り出し条坊復原を行う(文2-64)。		3月、『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会が発刊される(文2-55)。
昭和40年 (1965)		6月、「日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包含地の取扱いに関する覚書」が、文化財保護委員会とかわされ、発掘調査委託費は公団の負担となる(文2-56)。	
昭和41年 (1966)	5～6月、押小路殿跡の発掘調査が行われる(文2-13)。	11月、行政上の関連法規と事務手続き、発掘調査実務のマニュアル書ができる(文2-67)。	2月、東京、五島美術館で開催された「日本三彩と緑釉」展に坂東蔵品の緑釉陶器を出品(文2-68)。
昭和42年 (1967)	8月、「平安京の変遷」『日本の考古学』が出版されるが、平安京跡の調査結果には触れられず(文2-66)。		4月、東京、東武百貨店で開催された「紫式部展」に坂東蔵品の土器を出品(文2-68)。
昭和43年 (1968)			5月、(財)古代学協会の施設として平安博物館が開館(文2-60)。

平安京跡発掘略年表 - 4

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和44年 (1969)	2月、発掘で、内裏内郭回廊の南西部を検出(文2-10)。	坂東善平氏、有志10人と連名で「平安京内で行われた土木工事による遺物出土表」を添え「平安京保存の要望書」行政官庁に提出(文2-63)。	3月、平安博物館の建物、国の重要文化財に指定(文2-60)。
	4月、木村捷三郎、平安中期瓦の考察を行う(文2-65)。		
	5～6月、三条西殿跡の発掘が行われ、三条大路、烏丸小路の街路側溝を検出(文2-14)。		
昭和45年 (1970)		3月、関係官庁、地下鉄建設に伴う埋蔵文化財調査について協議を始める(文2-69)。	10月、京都国立博物館「京の古瓦特別展」に坂東蔵品の瓦が出品される(文2-68)。
		4月、京都市文化観光局に文化財保護課が誕生(文2-57)。	
昭和46年 (1971)	2月、学生がチームをつくり、本山、幡枝地区の分布調査を行い報告する(文3-159)。	4月、京都市文化財保護課に埋蔵文化財技師が就任(文3-144)。	12月、日本考古学協会、『埋蔵文化財白書』を公刊(文3-142)。
	9～10月、(財)古代学協会、下水敷設の立会で、延祿堂・修式堂の延石列を検出(文3-1)。	10月、京都市文化財保護課、地下鉄建設に伴う埋蔵文化財調査の計画案を提出(文3-147)。	
		11月、「建設省がおこなう道路事業の建設工事に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」が、文化庁から各都道府県教育委員会に通知。発掘調査費、整理保存費負担は建設省側になる(文3-143)。	
昭和47年 (1972)	1～2月、創建時と思われる東寺築地基壇を確認(文3-17)。	2月、京都市文化観光資源調査会が設立される(文3-145)。	
	2月、京都市、羅城門跡を発掘し、軒瓦1点出土(文3-46)。	3月、「京都府遺跡地図」が刊行される(文3-144)。	
	3月、二条保育園敷地内で緑釉瓦を多く伴う瓦溜を検出(文3-2)。	5月、山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査会が設立され調査団を組む(文3-146)。	
	5月、左京少将井遺跡の発掘を始める(文3-18)。	この頃、民間の原因者負担の発掘が盛んとなる。	
	11～12月、西寺跡から古墳時代の土器出土(文3-42)。	7月、山陰線高架工事に伴う平安京跡の調査が始まる。京都市の公共事業を対象に調査が実施された最初の調査となる(文3-49)。	
11月、京都市遺跡地図が公刊され、平安京全域が埋蔵文化財包蔵地となる(文3-140)。			

平安京跡発掘略年表 - 5

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和48年 (1973)	2～3月、平安京調査会が初めて発掘を行い、平安初期の整地層、井戸を検出(文3-117)。	2月、田辺昭三氏を代表にして平安京調査会が発足(文3-149)。	10月、京都会館会議場で、「烏丸通の埋蔵文化財について」の公開講演会、説明会を開催(文3-147)。
	3月、(財)古代学協会、三条西殿の東北部を発掘、中世の土壌、井戸、柱穴等を検出(文3-21)。	3月、京都市、平安京跡に対する保護、調査の基本構想を発表する(文3-148)。	
	3月、近藤喬一、西賀茂・東幡枝の瓦窯出土の文字瓦と平安宮跡出土瓦をあげ、盛行年代を考定(文3-161)。	4月、森浩一、平安京跡の開発による破壊が進んでいる実情を訴える(文3-157)。	
	3～4月、同志社大学、南蛮寺跡発掘。石製硯裏面にキリスト教儀式を表わす人物線画、桃山陶磁器など多量出土(文3-134)。	4月、大石良材、開発に対処のため平安宮の復原案を作る(文3-155)。	
	4月、平安宮東南限の隍を発見したとする。この頃、文化財保護課が直接、平安宮跡調査(文3-27)。	7月、京都府教育委員会から「土木事業の実施に伴う埋蔵文化財等の取扱いについて」の要綱を関係機関に通達(文3-143)。	
	7～12月、左京内膳町遺跡で、弥生前期の土器、石器が初めて出土する(文3-48)。	10月、伊藤玄三、重要な平安京跡の遺構は保存され活用されることが望ましいと述べる(文3-154)。	
	8月、内裏内郭回廊の基壇が発見され、西側が27m以上続くことを確認(文3-8)。	12月、京都市、設立準備会で京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会の設置を決める(文3-147)。	
	9～10月、(財)古代学協会、民部省の築地跡を検出(文3-9)。	12月、浪貝毅、京都市の埋蔵文化財行政の経過と実情を述べる(文3-156)。	
	10～12月、平安京調査会、朱雀院跡で平安前期の掘立柱建物を検出する(文3-122)。		
12月、六勝寺研究会、一条大路関連の発掘を行う。この頃、六勝寺研究会が活躍する(文3-131)。			
昭和49年 (1974)	5月、永田信一 平安京跡の遺跡パトロール、立会調査の必要性を述べる(文3-117)。	1月、京都市交通局から委託され、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会が発足する(文3-147)。	4月、埋蔵文化財速報と資料紹介を掲載する目的で『京都考古』第1号を発刊(文3-168)。
	6月、地下鉄烏丸線の試掘が開始され、弥生末期の土器が出土。烏丸綾小路遺跡発見の契機(文3-50)。	5月、林屋辰三郎、地下鉄烏丸線の発掘に対して平安京解明に大きな期待があると述べる(文3-172)。	
	7～11月、平安京調査会、左京四条一坊で大規模発掘を開始。四条坊門小路、平安～室町の遺構多数検出。平安後期の井戸から寛治五年の墨書土器、前期の井戸から「秋野方」と墨書する木製人形出土。(文3-118)。	8月、京都市遺跡地図が改訂される(文3-141)。 8月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会第4回理事会で、試掘の経過報告が行われる(文3-158)。	

平安京跡発掘略年表 - 6

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和49年 (1974)	7～翌年9月、鳥羽離宮跡調査研究所、右京の大規模発掘を始め、木辻大路と土御門大路の交差点部を検出する。北辺近くの街路検出で、2500分の1地図上の条坊復原の精度が高まる(文3-128)。	9月、地下鉄烏丸線のトレンチによる発掘が開始される(文3-158)。 11月、田辺昭三、烏丸通の地下には試掘の結果遺跡が良好に認められ、都市遺跡の調査法を確立することが重要と主張(文3-174)。	
	7～9月、平安後期の蘭林坊東南隅の築地を検出(文3-13)。	11月、地下鉄高速鉄道烏丸線の起工式が京都会館で行われる(文3-175)。	
	11～翌年5月、六角堂跡の発掘が行われ、中・近世の土器、陶磁器が多量出土(文3-22)。		
	12～翌年1月、平安宮中和院跡から針金状の純板金(金糸)が出土する(文3-33)。		
昭和50年 (1975)	2～3月、旧二条城濠の南面石垣が検出される(文3-63)。	10月、文化財保護法が一部改正される(文3-144)。	2月、龍谷大学大宮学舎敷地で、平安後期の井戸、室町の井戸を検出。現地説明会を行う(文3-173)。
	8～11月、平安中期の西大宮大路側溝、路面が検出され、牛のひずめ跡や車の轍跡が検出される(文3-123)。	10月、田辺昭三、平安京内はすべて調査対象とすべき。点に近い遺跡の幾つかを線につなぎ、更に線と線を合わせ面の認識に発展させるべき。それには記録上の原点になる測量基準点を定める必要があると主張する(文3-118)。	4～5月、現二条城内で『古京展 - 飛鳥から平安まで』が開催される(文3-169)。 6～7月、特別展観「日本出土の中国陶磁」が、東京国立博物館で開催され、平安京跡出土の中国陶磁も展示される(文3-170)。
昭和51年 (1976)	1～3月、地下鉄烏丸線の調査で、東本願寺前が中世の墓跡であることがわかる(文3-90)。	3月、梶川敏夫・浪貝毅、平安京内の遺跡状況から京都盆地の発掘では全時代を把握できる調査が必要と主張(文3-35)。	10月、『京都の歴史』全10巻の発刊が完了する(文3-171)。
	4月、豊楽院の正殿である豊楽殿の基壇の一部と柱跡の根固め石を検出する(文3-40)。	11月、平安京調査会、鳥羽離宮跡調査研究所、六勝寺研究会の3団体が母体となって、(財)京都市埋蔵文化財研究所が設立される(文3-152)。	
		12月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、覆工板下で発掘調査を始める(文3-176)。	
昭和52年 (1977)	4～7月、左京高倉宮・曇華院跡を発掘。建物跡、石組、石垣など検出(文3-163)。	3月、田中琢・田辺昭三、平安京跡発掘調査記録は、絶対位置の記録が欠け、国土直角座標系に結び付く記録方式を採用し改善することが重要と主張(文4-184)。	4月、現二条城内に、烏丸通下立売上ルで検出した旧二条城の石垣の移築作業を行う(文4-179)。
	12月、東寺境内の発掘調査を進める(文3-174)。		11月、(財)京都市埋蔵文化財研究所設立1周年記念事業として文化財講演会が開催される。これ以後毎年秋開催(文4-187)。
昭和53年 (1978)	1月、西寺跡で、大型の井戸の木枠を検出(文3-112)。	公共建物の屋上に京都市遺跡測量基準点が設置される。遺跡の位置の記録が国土座標によって行われるようになる(文4-185)。	(財)京都市埋蔵文化財研究所、保存処理専用施設を下鳥羽に開設する(文4-186)。
	2月、平安宮左兵衛府跡で、和歌を墨書した土師器片が出土(文4-48)。		5月、平安宮造酒司の倉庫跡検出、現地説明会が行われる(文4-189)。

平安京跡発掘略年表 - 7

年代	調査研究	行政	普及啓発
昭和53年 (1978)	2～12月、左京北辺三坊六町・内膳町遺跡の発掘で、「慶長九年」銘の付札出土(文4-170)。	3月、京都市埋蔵文化財センター等の施設整備費予算が市議会で議決され、考古資料館の建設が決定する(文4-177)。	11月、『シンポジウム平安京～平安京調査と現状を語り展望をひらく会～』京都市・(財)京都市埋蔵文化財研究所主催(文4-188)。
昭和54年 (1979)	3月、八賀晋、古代都城の占地を地形的環境から都城の占地を分析。平安京は東堀川、西堀川とも水量確保と運河造成の容易さを考慮した谷地形に基本をおくと指摘(文4-200)。	3月、田辺昭三、昭和51年度の開発ベースでいけば、わずか52年で平安京跡が完全消滅するという試算を報告(文4-178)。	平安宮内裏内郭回廊跡を史跡指定(文4-193)。
	7～9月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、面積78平方メートルを58日間かけて手掘りで発掘調査を実施。各時期の生活面をおさえ、20面におよぶ調査記録。平安前期から現代まで遺構を検出(文4-31)。		3月、パンフレット『埋もれた京都 - 地下鉄烏丸線の遺跡調査 -』を刊行(文4-211)。
	9～11月、室町第(花の御所)から釉裏紅盤片が出土(文4-33)。		3月、西寺東回廊跡の現地説明会が開催される(文4-119)。 10月、日本貿易陶磁学会が発足する(文4-202)。 11月、京都市考古資料館が開館する(文4-177)。
昭和55年 (1980)	1月、内裏内郭回廊の凝灰岩板石で造られた東側溝検出(文4-81)。	1月、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡の発掘調査が終了する(文4-179)。	3月、『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』が発刊される(文4-208)。
	5月、右京二条二坊で、縄文早期の押型文深鉢片が出土する(文4-108)。	4月、文化観光局内に京都市埋蔵文化財調査センターが新設される(文4-180)。	5～6月、京都御苑内に烏丸通丸太町上ルで検出された旧二条城の石垣が移築される(文4-179)。
	10月、右京五条二坊で平安前期から後期に続く西堀川小路東側を検出。堀川小路幅は8丈と確定(文4-131)。	10月、京都市の遺跡地図が改訂される(文4-181)。 11月、調査・研究は(財)京都市埋蔵文化財研究所が、保護は京都市埋蔵文化財調査センターが、文化財保護思想の普及啓発は京都市考古資料館が、中心となって3者は有機的に結合すべきと主張(文4-182)。	8月、京都市考古資料館、第1回小・中学生夏期教室を開催。以後毎年8月開催(文4-191)。 9月、第1回日本貿易陶磁研究集会在同志社大学で開催される。京都出土の輸入陶磁器についての研究発表(文4-203)。 10月、(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』を発刊する(文4-206)。
昭和56年 (1981)		4月、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター設立(文序-1)。	
		10月、京都市文化財保護条例が公布される。京都市文化観光資源調査会は「京都市文化財保護審議会」になる(文序-2)。	

参考文献

はじめに

- 序-1 中谷雅治「京都府の埋蔵文化財・調査研究センター・この10年」『京都府埋蔵文化財論集 - 創立十周年記念誌 - 』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991・3
- 序-2 「京都市文化財保護条例」『京都市条例』第20号 京都市 1981・10
- 1 . 平安京跡発掘事始め [寛政2年(1790)～昭和20年(1945)]
- 1-1 時枝 務「藤貞幹の古瓦譜 - 古瓦譜の基礎的研究(1) - 」『東国史論』第9号 群馬考古学研究会 1994・5
- 1-2 上原真人「文字瓦と考古学 - 藤原貞幹の転向 - 」『日本考古学協会第66回総会 - 研究発表要旨 - 』日本考古学協会 2000・5
- 1-3 湯本文彦ほか「平安京旧址実測全図」『平安通志』京都市参事会 1895・10
- 1-4 「考古学会趣意書」『考古学会雑誌』第1号 考古学会 1896・12
- 1-5 奥村探古「本邦各地ヨリ掘出ス古瓦二就テ」『考古学会雑誌』第1編第5号 考古学会 1897・5
- 1-6 関野 貞「古瓦模様沿革考」『考古界』第1篇第6号 考古学会 1901・11
- 1-7 河村松太郎「平安大内裏舊趾より採集の古瓦」『考古界』第2篇第9号 考古学会 1903・2
- 1-8 岩井武俊「平安京大極殿碧瓦の布目に就きて」『考古界』第6篇第10号 考古学会 1908・1
- 1-9 和田「彙報 京都の金箔押瓦発掘」『考古界』第8篇第7号 考古学会 1909・10
- 1-10 川勝政太郎「平安京城の古瓦」『京都史蹟』第1巻第5号 1930・5
- 1-11 安田茂登治「京都大宮釈迦谷出土の古瓦」『史迹と美術』第46号 史迹美術同致會 1933・9
- 1-12 高橋健自「古瓦に現れたる文字」『考古学雑誌』第5巻第12号 日本考古学協会 1915・8
- 1-13 泉 拓良・喜谷美宣「近畿」『岩波講座 日本考古学』別巻1 岩波書店 1986・8
- 1-14 梅原末治「西寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府 1920・6
- 1-15 梅原末治「修学院村高野の古瓦出土地」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府 1920・6
- 1-16 西田直二郎「聚楽第址(補遺)」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府 1920・6
- 1-17 梅原末治「修学院村平安宮所用瓦窯址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第3冊 京都府 1922・5
- 1-18 西田直二郎「河原町線萬屋町発見碧瓦」『京都府史蹟勝地調査会報告』第8冊 京都府 1927・5
- 1-19 西田直二郎「淳和院舊蹟」『京都府史蹟勝地調査会報告』第8冊 京都府 1927・5
- 1-20 佐藤虎雄「平安宮豊楽院の遺物」『古代文化』第6巻第4号 (財)古代学協会 1957・12
- 1-21 木村捷三郎「山城幡枝発見の瓦窯址 - 延喜式に見えたる栗栖野瓦屋 - 」『史林』第15巻第4号 1930・10 後再録『造瓦と考古学 - 木村捷三郎先生頌寿記念論集 - 』 1976・3
- 1-22 梅原末治「栗栖野瓦窯址調査報告」『京都府史蹟勝地調査会報告』第15冊 京都府 1934・3
- 1-23 塚本常雄「京都市域の変遷と其地理学的考察」『地理論叢』1号 1932・11
- 1-24 坪井清足「歴史学と遺跡学 - わが国の史跡指定を振り返って - 」『東と西の考古学』草風館 2000・4
- 1-25 「年表」『堤圭三郎さんの歩み』堤圭三郎さんの新しい門出を祝う会・堤さんに感謝し前途をお祝いする会 1996・5
- 1-26 「平安京大極殿址」『史迹と美術』第51号 史迹美術同致會 1935・2

永田 信一

- 1-27 黒板勝美「序文」『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊 京都府 1919・6
- 1-28 杉山信三「西寺の規模・造替・変遷」『史跡西寺跡』 鳥羽離宮跡調査研究所 1979・3
- 1-29 坪井清足「古代宮都発掘」『宮都発掘 - 古代を考える - 』 吉川弘文館 1987・10
- 1-30 木村捷三郎「平安京に於ける緑釉瓦の一考察」『考古学』第10巻第3号 1939・3 後再録『造瓦と考古学 - 木村捷三郎先生頌寿記念論集 - 』 1976・3
- 1-31 内藤政恒『本邦古硯考』 1944

2. 新たなる出発 [昭和21年(1946)~昭和45年(1970)]

- 2-1 勅使河原彰「戦後の日本考古学」『日本考古学史 - 年表と解説 - 』考古学選書 東京大学出版会 1988・10
- 2-2 宇佐晋一「延喜式と瓦の重量」『古代学研究』第1号 古代学研究会 1949・8
- 2-3 宇佐晋一「京都市警庁舎敷地遺跡調査報告」『古代学研究』第2号 古代学研究会 1950・2
- 2-4 宇佐晋一・小川敏雄「二条城前遺跡」『古代学研究』第15・16合併号 古代学研究会 1956・11
- 2-5 安井良三「平安宮朝堂院址の調査」『古代文化』第3巻第12号 (財)古代学協会 1959・12
- 2-6 鮎沢 寿「朝堂院址に関する新発見」『古代文化』第10巻第2号 (財)古代学協会 1963・2
- 2-7 鮎沢 寿「平安宮大極殿基壇の北端 - 喫茶店『井上』における調査豫報」『古代文化』第11巻第1号 (財)古代学協会 1963・7
- 2-8 大石良材「平安宮内裏址の調査」『古代文化』第13巻第1号 (財)古代学協会 1964・7 後再録『平安文化の研究2 平安博物館研究紀要』第3輯 (財)古代学協会 1971・6
- 2-9 大石良材・鮎沢 寿「平安宮跡、三条東殿跡の発掘調査」『古代文化』第15巻第2号 (財)古代学協会 1965・8
- 2-10 伊藤玄三・白石太一郎・近藤喬一・寺島孝一「平安宮内裏内閣回廊推定地の調査」『平安文化の研究2 平安博物館研究紀要』第3輯 (財)古代学協会 1971・6
- 2-11 近藤喬一・伊藤玄三・寺島孝一「平安宮豊楽院推定地(聚楽廻中町)の調査」『平安文化の研究2 平安博物館研究紀要』第3輯 (財)古代学協会 1971・6
- 2-12 「勸学院址の発掘調査」『古代文化』第1巻第5号 (財)古代学協会 1957・12
- 2-13 臈谷 寿・中谷雅治「押小路殿の研究」『平安文化の研究1 平安博物館研究紀要』第2輯 平安博物館 1971・2
- 2-14 白石太一郎・伊藤玄三・近藤喬一「平安京三条西殿跡発掘調査報告」『平安文化の研究2 平安博物館研究紀要』第3輯 (財)古代学協会 1971・6
- 2-15 寺島孝一「西寺跡発掘調査」『古代文化』第22巻第6号 (財)古代学協会 1970・6
- 2-16 「羅城門址の発掘調査」『古代文化』第5巻第5号 (財)古代学協会 1960・11
- 2-17 小倉洲二「平安京羅城門址の発掘調査(一)(二)」『古代文化』第7巻第3・4号 (財)古代学協会 1961
- 2-18 角田文衛「平安京宮殿跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1964 京都府教育委員会 1964・3
- 2-19 大石良材「平安宮跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1965 京都府教育委員会 1965・3
- 2-20 後藤柴三郎「東寺の古建築」『仏教芸術』第47号 仏教芸術学会 1961・11
- 2-21 杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要報』1964 京都府教育委員会 1964・3

- 2-22 杉山信三「西寺食堂跡」『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道
1965・3
- 2-23 木村捷三郎『坂東善平收藏品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・10
- 2-24 坂東善平「神泉苑遺蹟について」『古代学研究』第28号 古代学研究会 1961・7
- 2-25 坂東善平「平安京大内裏発見の緑釉土器」『古代学研究』第29号 古代学研究会 1961・10
- 2-26 坂東善平「高台による土器の年代考定」『古代学研究』第31号 古代学研究会 1962・5
- 2-27 坂東善平「平安時代後期の一遺蹟について」『古代学研究』第31号 古代学研究会 1962・5
- 2-28 坂東善平「京都市内発見の青磁器」『古代学研究』第33号 古代学研究会 1963・1
- 2-29 坂東善平「鴨井殿址」『古代学研究』第35号 古代学研究会 1963・9
- 2-30 坂東善平「聚楽第の遺蹟」『古代学研究』第35号 古代学研究会 1963・9
- 2-31 坂東善平「京都市内発見の陶製硯資料」『古代学研究』第37号 古代学研究会 1964・2
- 2-32 坂東善平「緑釉陶器資料」『古代学研究』第39号 古代学研究会 1964・12
- 2-33 坂東善平「滋野卿邸址出土品について」『古代学研究』第39号 古代学研究会 1964・12
- 2-34 坂東善平「私学会館出土の資料」『古代学研究』第40号 古代学研究会 1965・5
- 2-35 坂東善平「京都市内発見の緑釉陶器」『古代学研究』第40号 古代学研究会 1965・5
- 2-36 坂東善平「黒門遺蹟と近傍の遺物」『古代学研究』第46号 古代学研究会 1966・12
- 2-37 坂東善平「耳皿資料」『古代学研究』第46号 古代学研究会 1966・12
- 2-38 坂東善平「神泉苑周辺の遺蹟」『古代学研究』第48号 古代学研究会 1967・6
- 2-39 坂東善平「高台による土器年代考定2」『古代学研究』第50号 古代学研究会 1968・1
- 2-40 坂東善平「周縁に唐草文様をもつ軒丸瓦について」『古代学研究』第52号 古代学研究会 1968・8
- 2-41 坂東善平「平安宮推定内膳司址出土の土器」『古代学研究』第53号 古代学研究会 1968・12
- 2-42 坂東善平「二条城前遺蹟出土の瓦について」『古代文化』第10巻第2号 (財)古代学協会 1963・2
- 2-43 坂東善平「西寺址発見の資料」『古代文化』第11巻第3号 (財)古代学協会 1963・9
- 2-44 坂東善平「平安宮式部省址推定地出土の瓦」『古代文化』第11巻第5号 (財)古代学協会 1963・12
- 2-45 坂東善平「平安宮宮内省址推定地出土の資料」『古代文化』第11巻第5号 (財)古代学協会 1963・12
- 2-46 坂東善平「『木工』の文字瓦」『古代文化』第13巻第2号 (財)古代学協会 1964・8
- 2-47 坂東善平「千本通竹屋町周辺出土の史料」『古代文化』第14巻第3号 (財)古代学協会 1965・3
- 2-48 坂東善平「京都市立待賢小学校前遺蹟発見の緑釉土器とその他の出土資料」『古代文化』第15巻第2号 (財)古代学協会 1965・8
- 2-49 坂東善平「平安宮民部省跡推定地出土の軒丸瓦と陶質円面硯」『古代文化』第17巻第1号 (財)古代学協会 1966・7
- 2-50 坂東善平「平安宮内裏址推定地出土軒平瓦」『古代文化』第20巻第4号 (財)古代学協会 1968・4
- 2-51 坂東善平「平安宮内裏跡付近発見の鬼瓦」『古代文化』第20巻第6号 (財)古代学協会 1968・7
- 2-52 斎藤 忠「まいぞうぶんかざい」『日本考古学用語辞典』(株)学生社 1992・5
- 2-53 「年表」『堤圭三郎さんの歩み』堤圭三郎さんの新しい門出を祝う会・堤さんに感謝し前途をお祝いする会 1996・5
- 2-54 『京都府公報』第3752号 京都府 1963・10
- 2-55 京都府教育庁文化財保護課『埋蔵文化財発掘調査概報』1964 京都府教育委員会 1964・3

永田 信一

- 2-56 高橋美久二「京都の発掘史を振り返る」『京都の埋蔵文化財の明日のために - 活動の記録 (1992 ~ 1997) - 』 京都の埋蔵文化財を考えあう会 1998・9
- 2-57 「文化財保護組織の推移」『京都市文化観光資源調査会報告書 - 文化財保護行政のあり方について - 』 京都市文化観光資源調査会 1980・11
- 2-58 『日本考古学協会会報』No134 日本考古学協会 1998・7
- 2-59 田澤 坦「緒言 - 奈良国立文化財研究所の組織と役割について - 」『奈良国立文化財研究所年報』 1962 奈良国立文化財研究所 1962・4
- 2-60 「設立の趣旨と沿革」『財団法人古代学協会要覧』 (財)古代学協会 1996・8
- 2-61 「創刊の辞」『古代学』第1巻第1号 (財)古代学協会 1952・1
- 2-62 勅使河原彰「日本考古学の現状」『日本考古学史 - 年表と解説 - 』考古学選書 東京大学出版会 1988・10
- 2-63 木村捷三郎「坂東善平氏収蔵品について」『坂東善平収蔵品目録』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・10
- 2-64 杉山信三「平安京の造営尺について」『史迹と美術』第342号 史迹美術同友會 1964・2
- 2-65 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」『延喜天曆時代の研究』吉川弘文館 1969・4 後再録 『造瓦と考古学 - 木村捷三郎先生頌寿記念論集 - 』 1976・3
- 2-66 鈴木 充「平安京の変遷」『日本の考古学』河出書房新社 1967・8
- 2-67 『埋蔵文化財発掘調査の手引き』文化庁文化財保護部 1966・11
- 2-68 木村捷三郎「展覧会出品控」『坂東善平収蔵品目録』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・10
- 2-69 「遺跡調査会の設立」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会概要』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1976・1

3. 都市再開発と平安京跡 [昭和46年(1971) ~ 昭和51年(1976)]

- 3-1 伊藤玄三「平安宮朝堂院の遺構 - 延祿堂・修式堂 - 」『古代文化』第24巻第8号 (財)古代学協会 1972・8
- 3-2 寺島孝一「二条保育園敷地内出土の緑釉軒瓦」『古代文化』第24巻第7号 (財)古代学協会 1972・7
- 3-3 上野佳也「平安京左馬寮推定遺跡」『日本考古学年報』25 (1972年版) 日本考古学協会 1974・3
- 3-4 上野佳也・渡辺 誠・片岡 肇・鈴木忠司「推定平安宮内膳司地域内発掘調査報告」『平安博物館研究紀要』第5輯 (財)古代学協会 1974・3
- 3-5 寺島孝一・田中勝弘「平安宮神祇官町推定地の立合調査 - 京都市上京区竹屋町黒門東入ル - 」『古代文化』第26巻第5号 (財)古代学協会 1974・5
- 3-6 寺島孝一「平安宮推定豊楽院跡の調査 - 京都市中京区聚楽廻西町旧丸太町下ル - 」『古代文化』第26巻第4号 (財)古代学協会 1974・4
- 3-7 近藤喬一・寺島孝一・植山 茂『平安宮推定太政官跡の調査』平安博物館 1974・3
- 3-8 甲元真之・伊藤玄三「平安宮内裏内郭廻廊跡第2次調査」『平安博物館研究紀要』第6輯 (財)古代学協会 1976・3
- 3-9 戸田秀典・松井忠春「平安宮推定民部省跡の発掘調査」『平安博物館研究紀要』第6輯 (財)古代学協会 1976・3

- 3-10 寺島孝一「平安宮推定内裏跡出土の古瓦」『古代文化』第26巻第6号 (財)古代学協会 1974・6
- 3-11 松井忠春「平安宮推定朝堂院東廻廊跡発掘調査の概要 附 朝堂院承光堂跡の立合調査」『古代文化』第28巻第11号 (財)古代学協会 1976・11
- 3-12 上野佳也・寺島孝一「平安宮朝堂院推定地出土の緑釉瓦について」『日本考古学協会第40回総会 研究発表要旨』日本考古学協会 1974・5
- 3-13 寺島孝一ほか「平安宮推定内裏蘭林坊跡発掘調査の概要」『古代文化』第27巻第11号 (財)古代学協会 1975・11
- 3-14 甲元真之ほか「平安京左兵衛町跡の発掘調査」『古代文化』第28巻第7号 (財)古代学協会 1976・7
- 3-15 片岡 肇『平安宮大極殿跡の発掘調査 平安京跡発掘調査報告書』第1輯 (財)古代学協会 1976・11
- 3-16 甲元真之「平安宮朝堂院大極殿跡」『平安京研究資料集成 1 平安宮』柳原書店 1994・6
- 3-17 上野佳也・田中勝弘「東寺東側築地外発掘調査報告」『古代文化』第27巻第1号 (財)古代学協会 1975
- 3-18 大石良材・甲元真之『少将井遺跡発掘調査報告京都新聞社屋増改築に伴う調査』平安博物館 1972
- 3-19 上野佳也「竹三条殿遺跡」『日本考古学年報』25(1972年版) 日本考古学協会 1974・3
- 3-20 伊藤玄三・甲元真之「東五条第遺跡」『日本考古学年報』25(1972年版) 日本考古学協会 1974・3
- 3-21 植山 茂「第1～3次調査の概要」『三條西殿跡 平安京跡研究調査報告』第7輯 (財)古代学協会 1983・7
- 3-22 甲元真之『平安京六角堂の発掘調査 平安京跡研究調査報告』第2輯 (財)古代学協会 1977・3
- 3-23 近藤喬一・松井忠春「平安京東北隅一条大路・東京極大路の調査」『古代文化』第27巻第6号 (財)古代学協会 1975
- 3-24 寺島孝一ほか「第1部」『東洞院大路・曇華院跡 中京郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』近畿郵政局・平安博物館 1976・3
- 3-25 松井忠春・佐々木英男「平安京推定一条大路第二次調査概報」『古代文化』第28巻第9号 (財)古代学協会 1976・9
- 3-26 松井忠春ほか「第2部」『東洞院大路・曇華院跡 中京郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』近畿郵政局・平安博物館 1976・3
- 3-27 浪貝 毅・玉村登志夫「平安宮東・南限の発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1973 - 京都市文化観光局文化財保護課 1974・3
- 3-28 浪貝 毅・玉村登志夫「内膳司跡発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1973 - 京都市文化観光局文化財保護課 1974・3
- 3-29 浪貝 毅・玉村登志夫「大宿直跡発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1973 - 京都市文化観光局文化財保護課 1974・3
- 3-30 浪貝 毅・玉村登志夫「中和院跡発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1973 - 京都市文化観光局文化財保護課 1974・3
- 3-31 梶川敏夫「内裏跡推定地発掘調査概要」『平安京跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1974 - 京都市文化観光局文化財保護課 1975・3
- 3-32 梶川敏夫「造酒司跡推定地発掘調査概要」『平安京跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1974 - 京都

永田 信一

市文化観光局文化財保護課 1975・3

- 3-33 梶川敏夫「中和院跡推定地発掘調査概要」『平安京跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1974 - 京都市文化観光局文化財保護課 1975・3
- 3-34 甲元真之ほか「平安宮小安殿跡推定地発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 京都市文化観光局文化財保護課 1976・3
- 3-35 梶川敏夫・浪貝 毅「平安宮真言院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 京都市文化観光局文化財保護課 1976・3
- 3-36 梶川敏夫・浪貝 毅「平安宮太政官跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 京都市文化観光局文化財保護課 1976・3
- 3-37 梶川敏夫・浪貝 毅「平安宮会昌門跡発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 京都市文化観光局文化財保護課 1976・3
- 3-38 梶川敏夫・浪貝 毅「平安宮小安殿跡推定地第2次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 京都市文化観光局文化財保護課 1976・3
- 3-39 梶川敏夫「朝堂院暉章堂跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1976 - 京都市文化観光局文化財保護課 1977・3
- 3-40 梶川敏夫「平安宮豊楽殿跡緊急発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1976 - 京都市文化観光局文化財保護課 1977・3
- 3-41 甲元真之・佐々木英男・松井忠春「朝堂院永寧堂跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1976 - 京都市文化観光局文化財保護課 1977・3
- 3-42 浪貝 毅ほか「史跡西寺跡発掘調査報告」『京都埋蔵文化財年次報告』1972 京都市文化観光局文化財保護課 1974・8
- 3-43 浪貝 毅・玉村登志夫「西寺跡発掘調査概要」『史跡西寺跡・鳥羽離宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1973 - 京都市文化観光局文化財保護課 1974・3
- 3-44 梶川敏夫「史跡西寺跡 - 北僧房跡発掘調査概要 - 」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1974 - 』京都市文化観光局文化財保護課 1975・3
- 3-45 梶川敏夫「平安京・右兵衛町跡立合調査」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978 - (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・7
- 3-46 福山敏男・杉山信三・波貝 毅「羅城門跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1971 京都市文化観光局文化財保護課 1972・3
- 3-47 安藤信策「平安京修理職町跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1974 京都府教育委員会 1974・3
- 3-48 高橋美久二「内膳町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1974 京都府教育委員会 1974・3
- 3-49 田辺昭三・吉川義彦『平安京跡発掘調査報告 山陰線高架建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査団 1976・3
- 3-50 大矢義明「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 6」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-51 玉村登志夫「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 4」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3

- 3-52 峰 巍「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 5」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-53 大矢義明「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 2」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-54 峰 巍「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 1」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-55 永田信一「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 3」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-56 峰 巍「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 7」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-57 大矢義明「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 8」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-58 永田信一「1974年度のトレンチによる発掘調査 No. 9」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-59 峰 巍「1974年度のトレンチによる発掘調査 No.10」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-60 大矢義明「1974年度のトレンチによる発掘調査 No.11」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-61 永田信一「1974年度のトレンチによる発掘調査 No.12」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-62 永田信一「1974年度の立会い調査 立-2～6」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』 京都市
高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-63 峰 巍「1974年度のトレンチによる発掘調査 No.15」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-64 永田信一「1974年度のトレンチによる発掘調査 No.13」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-65 大矢義明「1974年度のトレンチによる発掘調査 No.14」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-66 永田信一「1974年度の立会い調査 立-7～9」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』 京都市
高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-67 永田信一「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.16」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-68 峰 巍「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.17」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-69 峰 巍「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.18」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-70 永田信一「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.19」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3

永田 信一

- 3-71 大矢義明「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.20」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-72 大矢義彦「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.21」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-73 大矢義彦「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.22」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-74 峰 巍「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.23」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-75 永田信一「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.24」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-76 永田信一「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.25」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-77 永田信一「1975年度の立会い調査 立-10」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』 京都市高速
鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-78 大矢義明「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.26」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-79 峰 巍「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.27」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-80 峰 巍「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.28」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-81 永田信一「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.29」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-82 峰 巍「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.30」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-83 峰 巍「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.31」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-84 大矢義明「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.32」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-85 大矢義明「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.33」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-86 永田信一「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.34」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-87 永田信一「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.35」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-88 大矢義明「1975年度の立会い調査 立-14」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』 京都市高速
鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-89 大矢義明「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.36」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3

- 3-90 大矢義明「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.37」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-91 峰 巍「1975年度のトレンチによる発掘調査 No.38」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-92 玉村登志夫「1975年度の立会い調査 立-15」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高
速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-93 「トレンチによる発掘調査 No.40」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸
線内遺跡調査会 1981・3
- 3-94 「トレンチによる発掘調査 No.39」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸
線内遺跡調査会 1981・3
- 3-95 「トレンチによる発掘調査 No.44」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸
線内遺跡調査会 1981・3
- 3-96 「トレンチによる発掘調査 No.41」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸
線内遺跡調査会 1981・3
- 3-97 「トレンチによる発掘調査 No.42」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸
線内遺跡調査会 1981・3
- 3-98 「トレンチによる発掘調査 No.43」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸
線内遺跡調査会 1981・3
- 3-99 「トレンチによる発掘調査 No.45」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸
線内遺跡調査会 1981・3
- 3-100 「トレンチによる発掘調査 No.46」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏
丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-101 「トレンチによる発掘調査 No.47」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏
丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-102 「トレンチによる発掘調査 No.48」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏
丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-103 「トレンチによる発掘調査 No.49」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏
丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-104 「トレンチによる発掘調査 No.50」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏
丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-105 「トレンチによる発掘調査 No.51」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏
丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-106 「立会い調査 立-16」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調
査会 1981・3
- 3-107 「トレンチによる発掘調査 No.52」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏
丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-108 「トレンチによる発掘調査 No.53」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏
丸線内遺跡調査会 1981・3

永田 信一

- 3-109 「トレンチによる発掘調査 No.54」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-110 「トレンチによる発掘調査 No.55」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-111 「トレンチによる発掘調査 No.56」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-112 「トレンチによる発掘調査 No.57」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-113 「トレンチによる発掘調査 No.58」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-114 「覆工板下の調査 X-3」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-115 「覆工板下の調査 X-1」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 3-116 吉川義彦「平安京跡(9)」『日本考古学年報』29(1976年版) 日本考古学協会 1978・4
- 3-117 永田信一「平安京関係遺跡の調査に関する二・三の提言」『平安京研究』No1 平安京調査会 1974・5
- 3-118 田辺昭三・吉川義彦『平安京跡発掘調査報告 - 左京四条一坊 -』平安京調査会 1975・10
- 3-119 鈴木久男「平安京跡(4)」『日本考古学年報』29(1976年版) 日本考古学協会 1978・4
- 3-120 田辺昭三・木下保明『平安京発掘調査報告 - 左京八条四坊 -』平安京調査会 1977・3
- 3-121 田辺昭三・吉川義彦「旧丹波口駅跡発掘調査」『平安京跡発掘調査報告 山陰線高架建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査団 1976・3
- 3-122 永田信一「朱雀院跡発掘調査概要」『平安京研究』No1 平安京調査会 1974・5
- 3-123 吉川義彦「平安京・朱雀院跡と西宮領跡」『仏教芸術』第115号 仏教芸術学会 1977・10
- 3-124 杉山信三・長宗繁一「日本電信電話公社九条局加増工事に伴う教王護国寺南大門前の埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』1976 鳥羽離宮跡調査研究所 1976・8
- 3-125 杉山信三・長宗繁一『京都法務合同庁舎新嘗地に於ける埋蔵文化財発掘調査概報 - 平安京左京近衛町尻 -』法務大臣官房会計課・鳥羽離宮跡調査研究所 1975・11
- 3-126 杉山信三「第一次調査」『史跡西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所 1979・3
- 3-127 杉山信三「第二次調査」『史跡西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所 1979・3
- 3-128 杉山信三『住宅公団花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報 - 平安京右京土御門木辻 -』日本住宅公団大阪支所・鳥羽離宮跡調査研究所 1975・10
- 3-129 江谷 寛『聚楽第跡発掘調査報告』平安宮跡発掘調査団 1977・1
- 3-130 江谷 寛「平安宮遺跡」『日本考古学年報』28(1975年版) 日本考古学協会 1977・4
- 3-131 木村捷三郎・畑美樹徳「発掘調査の概要」『大將軍社跡発掘調査報告』六勝寺研究会 1975・5
- 3-132 木下保明「平安宮・内蔵寮跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978 - (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・7
- 3-133 本弥八郎「平安京跡(10)」『日本考古学年報』29(1976年版) 日本考古学協会 1978・4

- 3-134 森 浩一「姥柳町遺跡(南蛮寺跡)調査概要」『同志社大学文学部考古学調査記録』第2号 1973・8
- 3-135 森 浩一「京都市中京区六角町遺跡調査概要」同志社大学文学部文化学科考古学研究室 1976・1
- 3-136 網干善教『龍谷大学構内発掘調査報告書 - 大宮学舎西翼・清和館建設に伴う事前調査 - 』龍谷大学校地学術調査委員会 1980・3
- 3-137 網干善教『重要文化財龍谷大学正門 - 解体修理にともなう事前発掘調査報告書 - 』龍谷大学校地学術調査委員会 1977・12
- 3-138 「京都市護王神社境内遺跡の発掘調査概報」『花信風』創刊号 花園大学考古学研究会 1976
- 3-139 山田良三「壺内町遺跡」『日本考古学年報』29(1976年版) 日本考古学協会 1978・4
- 3-140 浪貝 毅「考古学からの平安京研究」『平安京提要』角川書店 1994・6
- 3-141 京都市文化観光局文化財保護課『京都市遺跡地図台帳』(財)京都市文化観光資源保護財団 1974・8
- 3-142 『埋蔵文化財白書』日本考古学協会 1971・12
- 3-143 高橋美久二「京都の発掘史を振り返る」『京都の埋蔵文化財の明日のために - 活動の記録(1992~1997) - 』京都の埋蔵文化財を考えあう会 1998・9
- 3-144 「年表」『堤圭三郎さんの歩み』堤圭三郎さんの新しい門出を祝う会・堤さんに感謝し前途をお祝いする会 1996・5
- 3-145 梶川敏夫「故浪貝毅氏を偲んで」『京都考古』第68号 1993・2
- 3-146 田辺昭三ほか「調査の沿革」『平安京跡発掘調査報告 山陰線高架建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査団 1976・3
- 3-147 「遺跡調査会の設立」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会概要』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1976・1
- 3-148 「平安京跡保護調査の基本構想」『京都市文化観光資源調査会報告書』京都市文化観光局 1973・3
- 3-149 田辺昭三『平安京研究』No1 平安京調査会 1974・5
- 3-150 浪貝 毅・玉村登志夫『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1973 - 京都市文化観光局文化財保護課 1974・3
- 3-151 「設立の経過と沿革」『 - 京都発掘20年 - (財)京都市埋蔵文化財研究所設立20周年記念誌 - 』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996・11
- 3-152 「設立趣意書」『京都発掘20年 - (財)京都市埋蔵文化財研究所設立20周年記念誌 - 』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996・11
- 3-153 森 浩一・坂詰秀一ほか『シンポジウム - 歴史時代の考古学 - 』学生社 1971・9
- 3-154 伊藤玄三「平安京の発掘と保存・活用について」『地方史研究』第125号 1973・10
- 3-155 大石良材「平安宮の復原」『古代文化』第25巻第4号 (財)古代学協会 1973・4
- 3-156 浪貝 毅「平安京跡の発掘調査 - 都市再開発地域における調査の実情 - 」『日本歴史』第307号 1973・12
- 3-157 森 浩一「平安京をどうするか」『古代学研究』第67号 古代学研究会 1973・4
- 3-158 「調査の経緯」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 3-159 同志社大学文化史専攻生・幡枝地区遺跡研究グループ「京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録」1971・7

永田 信一

- 3-160 「調査経過」『京都市北区西賀茂地区遺跡分布調査報告書1』 京都産業大学考古学部 1976・3
- 3-161 近藤喬一「平安時代の文字瓦について」『古代文化』第25巻第2・3号 (財)古代学協会 1973・3
- 3-162 伊藤玄三「平安宮跡出土の奈良型式瓦」『古代文化』第25巻第2・3号 (財)古代学協会 1973・3
- 3-163 高橋美久二「平安時代後期の地方瓦窯と京都への供給」『京都考古』第12号 1975・4
- 3-164 高橋美久二「平安京の外港淀津付近採集の古瓦」『京都考古』第18号 1975・12
- 3-165 木村捷三郎「京都洛北『河上瓦屋』址発見の宇瓦について」『古代文化』第27巻第10号 (財)古代学協会 1975・7
- 3-166 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見 補論」『古代文化』第27巻第12号 (財)古代学協会 1975・12
- 3-167 『土師式土器集成』本編4 1974・9
- 3-168 安藤信策「船井郡八木町鳥羽瓦窯発掘調査概要」『京都考古』第1号 1974・4
- 3-169 京都市・京都新聞社「平安京」『古京展 - 飛鳥から平安まで』 京都新聞社 1975・4
- 3-170 東京国立博物館「序」『日本出土の中国陶磁』 東京美術 1978・6
- 3-171 『京都の歴史』第10巻 京都市 1976・10
- 3-172 林屋辰三郎「平安京遺跡調査への期待」『平安京研究』No1 平安京調査会 1974・5
- 3-173 『龍谷大学大宮学舎現地説明会資料 - 平安京東市内の発掘調査 - 』 龍谷大学校地学術調査委員会 1975・2
- 3-174 「京都市高速鉄道烏丸線」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会概要』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1976・1
- 3-175 田辺昭三「地下鉄烏丸線工事と埋蔵文化財の調査 - 平安京研究の新しい方向 - 」『月刊百科』No146 1974・11
- 3-176 「調査の経過」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3

4 . 平安京跡調査の展開 [昭和52年(1977) ~ 昭和55年(1980)]

- 4-1 「覆工板下の調査 X-2」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 4-2 「立会い調査 立-17」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 4-3 「立会い調査 立-18」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 4-4 「トレンチによる発掘調査 No.59」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 4-5 「トレンチによる発掘調査 No.60」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 4-6 「トレンチによる発掘調査 No.61」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3
- 4-7 「覆工板下の調査 X-4」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981・3

- 調査会 1981・3
- 4-8 「1977年度の立会い調査 立-19」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-9 「1977年度の覆工板下調査 X-5」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-10 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.62」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-11 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.68」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-12 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.67」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-13 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.64」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-14 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.63」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-15 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.65」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-16 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.66」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-17 「1977年度の覆工板下調査 X-6」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-18 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.69」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-19 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.70」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-20 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.74」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-21 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.71」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-22 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.72」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-23 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.73」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-24 「1977年度のトレンチによる発掘調査 No.75」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-25 「1977年度の覆工板下調査 X-7」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-26 「1978年度の立会い調査 立-20」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線

永田 信一

内遺跡調査会 1982・3

- 4-27 「1978年度の立会い調査 立-21」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-28 「1978年度の立会い調査 立-22」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-29 「1978年度のトレンチによる発掘調査 No.76」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-30 「1978年度の立会い調査 立-23」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-31 「1979年度のトレンチによる発掘調査 No.77」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-32 「1979年度のトレンチによる発掘調査 No.78」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-33 「1979年度のトレンチによる発掘調査 No.79」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-34 「1979年度のトレンチによる発掘調査 No.80」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-35 本弥八郎「平安宮造酒司跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1977 - (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977・8
- 4-36 平田 泰「平安宮東限跡」『平安京研究資料集成 1 平安宮』柳原書店 1994・6
- 4-37 菅田 薫「付章22 宮南東部」『平安宮 1 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-38 木下保明「平安宮太政官跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3
- 4-39 本弥八郎「平安宮主水司跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3
- 4-40 百瀬正恒「平安宮西雅院跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3
- 4-41 辻 裕司「付章24 縫殿寮跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-42 堀内明博「付章25 大蔵省跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-43 木下保明「付章 3 西院跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-44 鈴木廣司「付章 4 漆室跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-45 平田 泰「平安宮大極殿跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3
- 4-46 平田 泰「平安宮八省院跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3
- 4-47 平田 泰「平安宮内裏跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3
- 4-48 平尾政幸「平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3
- 4-49 堀内明博「平安宮朝堂院康楽堂跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3

- 4-50 平田 泰「付章26 宮南東部」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-51 本弥八郎「付章2 造酒司跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-52 平田 泰「付章27 御井跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-53 平田 泰「付章23 典薬寮跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-54 平田 泰「平安宮中和院跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-55 平尾政幸「平安宮中務省跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-56 本弥八郎「平安宮陰陽寮跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-57 平尾政幸「平安宮朝堂院跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-58 平田 泰「付章28 内裏跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-59 平田 泰「平安宮豊楽院跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-60 百瀬正恒「平安宮太政官跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-61 本弥八郎「平安宮朝堂院跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-62 平田 泰「付章5 正親司跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-63 平尾政幸「平安宮小安殿跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-64 長宗繁一「平安宮太政官跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-65 鈴木廣司「付章6 主殿寮跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-66 平田 泰「付章7 図書寮跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-67 平田 泰「平安宮中務省跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-68 上村和直「付章29 宴松原・造酒司跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5

永田 信一

- 4-69 木下保明「平安宮大炊寮跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-70 鈴木廣司「付章8 茶園跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-71 上村和直「付章30 豊楽院跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-72 磯部 勝「付章9 御井跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-73 平田 泰「付章31 宮内省 - 主水司跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-74 木下保明「平安宮中和院跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-75 鈴木廣司「付章10 豊楽院跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-76 上村和直「平安宮太政官跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-77 鈴木広司「平安宮大蔵省跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-78 高橋 潔「付章32 朝堂院・太政官・中務省跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-79 吉村正親「付章11 内蔵寮跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-80 堀内明博「付章12 朝堂院跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-81 上村和直「平安宮内裏内郭回廊跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-82 平田 泰「付章14 朝堂院跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-83 辻 裕司「付章15 中務省跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-84 丸川義広「平安宮朝堂院跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-85 辻 裕司「平安宮中務省跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-86 磯部 勝「平安宮梨本院跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-87 磯部 勝「平安宮太政官跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3

- 4-88 木下保明「付章33 東雅院・大膳職跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-89 前田義明「平安宮朝堂院跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-90 前田義明「平安宮縫殿寮跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-91 平田 泰「平安宮豊楽院跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-92 前田義明「付章16 太政官跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-93 平田 泰「付章17 朝堂院跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-94 堀内明博「平安宮西雅院跡」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-95 木下保明「付章35 治部省 - 判事跡」『平安宮 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995・5
- 4-96 吉村正親「平安京・左京九条二坊跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978 - (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・7
- 4-97 浪貝 毅「平安京跡(11)」『日本考古学年報』29(1976年版) 日本考古学協会 1978・4
- 4-98 浪貝 毅「平安京・左京八条三坊跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978 - (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・7
- 4-99 永田信一『平安京左京七条三坊跡 - 法蔵館敷地内の発掘調査 - 』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・8
- 4-100 (財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京八条三坊 京都駅前地下街建設に伴う発掘調査』京都ステーションセンター株式会社 1980・11
- 4-101 長宗繁一「平安京左京九条四坊跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市文化観光局 1979・3
- 4-102 鈴木廣司『平安京左京八条三坊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第6冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1982・5
- 4-103 『平安京左京一条二坊跡 - 日本電信電話公社西陣電話局増築予定地における発掘調査概要報告 - 』昭和53年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・3
- 4-104 『史跡二条城(電気配線工事に伴う立会調査概要)』昭和53年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1979・3
- 4-105 上村和直「平安京左京四条三坊跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-106 辻 裕司「平安京七条坊門小路跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-107 「主要遺跡概説 西市跡」『平安京跡発掘資料選』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・10

永田 信一

- 4-108 (財)京都市埋蔵文化財研究所「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度
京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-109 長宗繁一「西寺東僧房跡(西寺跡第10次調査)」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光
局 1978・3
- 4-110 中村 敦「平安京右京二条四坊」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 京都市埋
蔵文化財研究所調査報告』第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997・2
- 4-111 「107・108 濠跡」『平安京跡発掘資料選(二)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1986・11
- 4-112 長宗繁一「西寺井戸跡(西寺跡第12次調査)」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局
1978・3
- 4-113 磯部 勝『平安京右京四条一坊(西宮領跡) 株式会社 京都中央信用金庫壬生支店新築予定地にお
ける発掘調査の概要』昭和53年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・12
- 4-114 辻 裕司『平安京右京五条二坊 京都市立朱雀第七小学校校舎増設に伴う発掘調査の概要』昭和
53年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1979・3
- 4-115 百瀬正恒「平安京西寺跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978 京都市
文化観光局 1979・3
- 4-116 平尾政幸「平安京右京三条二坊跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978
京都市文化観光局 1979・3
- 4-117 中村 敦『平安京西市跡 - 南病院中棟新築工事に伴う発掘調査の概要 - 』昭和53年度 (財)京都市埋
蔵文化財研究所 1980・7
- 4-118 平田 泰『平安京右京九条二坊 京都市立洛陽工業高校図書館新築工事に伴う発掘調査の概要』
昭和53年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・6
- 4-119 堀内明博『史跡西寺跡発掘調査 - 現地説明会資料 - 』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1979・3
- 4-120 『平安京右京四条一坊跡 - 日本電信電話公社社宅建設予定地における発掘調査概要報告』昭和53年度
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・2
- 4-121 鈴木廣司『平安京右京六条一坊 京都中央卸売市場青果棟新築に伴う発掘調査概要』 昭和53年度
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・3
- 4-122 平尾政幸「十町地区の調査」『平安京右京三条三坊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第10冊
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990・3
- 4-123 平方幸雄・辻 純一「史跡妙心寺境内」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調
査の概要』1979年度 京都市文化観光局 1980・3
- 4-124 平方幸雄「史跡妙心寺境内・平安京右京北辺四坊1」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡
調査報告 - 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997・2
- 4-125 加納敬二「平安京右京三条三・四坊」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 京都
市埋蔵文化財研究所調査報告』第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997・2
- 4-126 加納敬二「平安京右京二条三・四坊」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 京都
市埋蔵文化財研究所調査報告』第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997・2
- 4-127 平尾政幸「三町地区の調査」『平安京右京三条三坊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第10冊
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990・3

- 4-128 鈴木廣司「西寺跡第17次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-129 堀内明博「西寺跡第18次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-130 長宗繁一「西寺跡第19次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-131 堀内明博「平安京右京五条二坊」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981・3
- 4-132 本弥八郎「平安京羅城門跡」『平安京跡発掘調査概要』1977年 京都市文化観光局 1978・3
- 4-133 浪貝 毅「西院跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1976 - 京都市文化観光局文化財保護課 1977・3
- 4-134 浪貝 毅「平安京東限推定地発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1976 - 京都市文化観光局文化財保護課 1977・3
- 4-135 浪貝 毅「内蔵寮跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告』1976 - 京都市文化観光局文化財保護課 1977・3
- 4-136 梶川敏夫「平安宮・太政官跡立合調査」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978 - (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・7
- 4-137 木下保明「平安宮内裏跡立会調査(No31)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-138 試掘・立会調査一覧表』『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-139 梶川敏夫「平安京・後院町跡試掘調査」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978 - (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・7
- 4-140 平方幸雄「左京五条四坊跡立会調査(No55)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-141 鈴木久男「左京五条三坊跡試掘調査(No151)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-142 長宗繁一「左京三条三坊跡試掘調査(No171)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-143 長宗繁一「左京五条四坊跡試掘調査(No178)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-144 平方幸雄「左京四条三坊跡試掘調査(No225)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-145 木下保明「左京二条四坊跡立会調査(No251)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-146 堀内明博「左京七条四坊跡立会調査(No284)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-147 堀内明博「左京七条三坊跡立会調査(No301)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による

- 試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-148 堀内明博「左京四条三坊跡立会調査(南蛮寺)(No311)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-149 堀内明博「左京五条三坊跡立会調査(No317)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-150 辻 裕司「左京五条二坊跡立会調査(No353)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-151 辻 裕司「左京六条二坊跡試掘調査(No375)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-152 辻 裕司「左京四条三坊跡立会調査(No381)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-153 菅田 薫「左京七条三坊跡試掘調査(No408)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-154 菅田 薫「左京七条一坊跡試掘調査(No447)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-155 鈴木広司「左京五条三坊跡試掘調査(No506)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-156 堀内明博「右京五条二坊跡試掘調査(No304)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-157 鈴木広司「右京六条四坊跡立会調査(No350)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-158 辻 裕司「右京三条二坊跡立会調査(No384)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-159 菅田 薫「右京二条二坊跡立会調査(No440)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-160 鈴木広司「右京八条二坊跡立会調査(No472)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-161 鈴木広司「右京一条三坊跡試掘調査(No524)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-162 鈴木広司「右京一条二坊跡試掘調査(No559)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-163 飯島武次ほか『平安京高倉宮・曇華院跡の発掘調査』(財)古代学協会 1979・3
- 4-164 松井忠春「平安京押小路殿跡第2次調査」『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町 平安京跡研究調査報告』第12輯 (財)古代学協会 1984・3
- 4-165 渡辺 誠『平安京土御門烏丸内裏跡 - 左京一條三坊九町 - 平安京跡研究調査報告』第10輯 (財)古代学協会 1983・12
- 4-166 佐々木英夫『平安京左京五条三坊十五町 平安京跡研究調査報告』第5輯 (財)古代学協会 1981・7
- 4-167 下條信行・川西宏幸『平安京左京八條三坊二町 平安京跡研究調査報告』第6輯 (財)古代学協会

1983・7

- 4-168 横田洋三「平安京押小路殿跡第3次発掘調査」『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町 平安京跡研究調査報告』第12輯 (財)古代学協会 1984・3
- 4-169 芝野康之「平安京左京三条三坊十一町の調査」『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町 平安京跡研究調査報告』第12輯 (財)古代学協会 1984・3
- 4-170 平良泰久・奥村清一郎ほか「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1980第3分冊 京都府教育委員会 1980・3
- 4-171 平良泰久「平安京跡(二条大路)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1980第3分冊 京都府教育委員会 1980・3
- 4-172 平良泰久「平安京跡(右京一条三坊九町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1980第3分冊 京都府教育委員会 1980・3
- 4-173 松井忠春 水谷寿克「平安京右京二条二坊五町跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1980第3分冊 京都府教育委員会 1980・3
- 4-174 樋口隆久『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』 教王護国寺 1980・3
- 4-175 「設立趣意書」『京都発掘20年 - (財)京都市埋蔵文化財研究所設立20周年記念誌 - 』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996・11
- 4-176 田中 琢「政令指定都市における遺跡の保護体制の実態と京都市」『京都市文化資源調査会報告書』京都市文化観光局 1978・3
- 4-177 「設立の経過と沿革」『京都発掘20年 - (財)京都市埋蔵文化財研究所設立20周年記念誌 - 』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996・11
- 4-178 田辺昭三「京都市内(特に平安京跡)の土木工事と埋蔵文化財について」『京都市文化資源調査会報告書』(1977) 京都市文化観光局 1979・3
- 4-179 「調査の経過」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982・3
- 4-180 「文化財保護組織の推移」『京都市文化観光資源調査会報告書 - 文化財保護行政のあり方について - 』京都市文化観光資源調査会 1980・11
- 4-181 (財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市遺跡地図』昭和55年10月 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市埋蔵文化財調査センター1980・10
- 4-182 「埋蔵文化財」『京都市文化観光資源調査会報告書 - 文化財保護行政のあり方について - 』京都市文化観光資源調査会 1980・11
- 4-183 梶川敏夫「編集後記」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告』昭和54年度 京都市文化観光局文化財保護課 1980・3
- 4-184 田中 琢 田辺昭三「平安京を中心とした京都市域の埋蔵文化財発掘調査の記録方法の改善について」『京都市文化観光資源調査会報告書』京都市文化観光局 1977・3
- 4-185 平尾政幸「測量成果による条坊復元と遺跡の位置」『平安京右京三条三坊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第10冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990・3
- 4-186 「保存処理」『京都発掘20年 - (財)京都市埋蔵文化財研究所設立20周年記念誌 - 』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996・11

永田 信一

- 4-187 「文化財講演会」『京都発掘20年 - (財)京都市埋蔵文化財研究所設立20周年記念誌 - 』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996・11
- 4-188 村田治郎「ごあいさつ」『シンポジウム平安京 - 平安京調査と現状を語り展望をひらく会 - 』京都市・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・11
- 4-189 『平安宮造酒司跡発掘調査 - 現地説明会資料 - 』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978・5
- 4-190 『京都市の埋蔵文化財 展示図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1976・10
- 4-191 南出彦彦「考古資料館夏期教室」『リーフレット京都』No56 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1993・10
- 4-192 浪貝 毅・梶川敏夫「史跡栗栖野瓦窯跡表面採集瓦」『京都市埋蔵文化財年次報告』1976 - 京都市文化観光局文化財保護課 1977・3
- 4-193 「年表」『堤圭三郎さんの歩み』堤圭三郎さんの新しい門出を祝う会・堤さんに感謝し前途をお祝いする会 1996・5
- 4-194 金子欣哉「序」『埋蔵文化財発掘調査概報』1979 京都府教育委員会 1979・3
- 4-195 近藤喬一「平安京・平安宮」『仏教芸術』第115号 仏教芸術学会 1977・10
- 4-196 杉山信三「平安京・西寺跡」『仏教芸術』第115号 仏教芸術学会 1977・10
- 4-197 永田信一「平安京・烏丸通」『仏教芸術』第115号 仏教芸術学会 1977・10
- 4-198 酒井 将「泥面子について - その若干の考察 - 」『重要文化財龍谷大学正門 - 解体修理にともなう事前発掘調査報告書 - 』龍谷大学校地学術調査委員会 1977・12
- 4-199 木村捷三郎「出土遺物」『六勝寺跡 - 六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 - 』六勝寺研究会 1977・3
- 4-200 八賀 晋「古代都城の占地について - その地形的環境 - 」『学叢』創刊号 京都国立博物館 1979・3
- 4-201 岸 俊男「創刊の辞」『木簡研究』創刊号 木簡学会 1979・11
- 4-202 「日本出土の中国陶磁」『中国陶磁』第12巻 平凡社 1995・9
- 4-203 亀井明德「日本貿易陶磁研究会成立の経緯」『貿易陶磁研究』No1 日本貿易陶磁研究会 1981・8
- 4-204 有志『研究発表会資料』1979・8
- 4-205 橋本久和・藤澤真依「埋蔵文化財担当交流会(仮称)第一回~三回の経過」『大阪文化誌』第3巻第3号 1978・5
- 4-206 「『平安京跡発掘資料選』の編集にあたって」『平安京跡発掘資料選』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1979・10
- 4-207 甲元真之『平安京六角堂の発掘調査 平安京跡研究調査報告』第2輯 (財)古代学協会 1977・3
- 4-208 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980・3
- 4-209 近藤喬一「解説篇」『平安京古瓦図録』雄山閣出版 1977・7
- 4-210 井上満郎「展望 - むすびにかえて - 」『研究史平安京』吉川弘文館 1978・8
- 4-211 「調査のあらまし」『埋もれた京都 - 地下鉄烏丸線の遺跡調査 - 』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1979・3